

---

# 闇守護業 7 《緑鏡》

祐太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇守護業 7 《緑鏡》

### 【Nコード】

N0072C

### 【作者名】

祐太

### 【あらすじ】

近未来の日本には、荒廃した無法地帯『裏社会』があつた。そんな光の届かぬ闇の世界で、守護を貫く者達がいる。『闇守護業』第七話は、深愛と憎悪が絡み合う優しさの鎮魂歌。中野区支部の出張！探検！遭遇！？

## 《ナルキツソスの呪い》

ナルキツソスはただの愚か者ではない、彼は呪われていたのだ。

他人を愛せない、見目麗しい少年がいた。他人の愛し方を知らなかった。

更にそこへ復讐の神が呪いをかけ、少年は世界でたった一人しか愛せないようにされた。

彼は何よりも大切な《鏡》を死守し、その先の人間を愛し、微笑む鏡像だけを心から信じた。

呪いだっただのだ、それしか生きる術がなかったのだ、それでも汝は少年を嘲笑うか？

やがて彼は、鏡と共に朽ち果てていく。

ささやかな愛が満ち溢れていた遠い過去を想い、嘆きながら。



## 主な登場人物紹介（前書き）

主たる登場キャラクターの紹介です。

『闇守護業』はシリーズ物ですが、この紹介を読めば初めての方でもほはおわかりいただけるかと思えます。

## 主な登場人物紹介

『闇守護業』 主な登場人物

蒼波 遼平…21歳

紺色のやや長い髪は寝癖でいつもボサボサ、瞳は漆黑。裏警備会社《ロスキーパー》中野区支部社員の男。元・東京最強のグループ『スカイ』を裏切ったため、「最低最悪の裏切り者、《邪鬼の権化》」と呼ばれている。

『音の民』蒼波一族の末裔で、普通人間には聞こえない超音波を聞き取り、発する能力を持つ。聴覚が非常に優れており、蝙蝠との意思疎通まで可能。肉弾戦が得意。

面倒臭がりでキレやすい。頭の回転は鈍く、ほとんど勘で行動。ふざけた態度と感情的な言動、かなり野生的。自己中心的な性格。

純也…?歳

白銀の髪、ライトブルーの双眸。裏警備会社LK中野区支部の社員兼治療員担当の少年。見た目は15〜6歳程度で、現在は遼平のアパートに居候中。

2年前、遼平に拾われた時以前の記憶が無く、覚えているのは自分の名前らしき『純也』と膨大な医学の知識だけ。どこの誰なのかは一切不明。風を操る不思議な特殊能力があるが、普段は専ら合気道に近い武術を使う。

穏やかで非常に優しく、記憶力・洞察力に長けるが子供っぽい。とても知能が高く、感受性豊かで、好奇心が強い。趣味は料理と折り紙、更に大食い。身長が低く遼平より頭一個分下。人や動物を傷つけることを嫌い、殺生を憎む。

霧辺 きりへ 真 しん：25歳

金の跳ねた短髪。眼は黒で、皮膚は浅黒い。裏警備会社LKの若き中野区支部部長。関西弁を話す、自称『愛の警備員』であり、過去の連続殺人犯《斬魔》ザンマでもある。

普段は腰に下げた木刀で敵を薙ぎ払うが、それは鞘であり、中に凶刃『阿修羅』が収まっている。閃斬センザン白虎流剣術ビヤッコの使用者。

いつもは賑やかな遼平達の傍観者だが、最近は特に部下にイジられ気味。メンバーの中では最もマトモな感性の持ち主で、責任感が強く、広い視野から物事を見極める事の出来る貴重な人物。最近、メンバーの非常識な言動に胃薬が手放せない、苦勞人。一度暴走し始めてしまった部下（主に遼平）を止める為、ハリセンを常に携帯している。実は物凄い愛妻家。

紫牙 しが 澪斗 れいと：22歳

淡緑色、ストレートな短髪。瞳は暗褐色。かなりの美男。裏警備会社LK中野区支部社員の男。かつて暗殺成功率百パーセントの殺し屋、エクスキューション消去執行人との異名を持っていた。

仕事中かけている眼鏡は別に目が悪いわけではなく、希紗の作った照準グラス。ちなみに、澪斗が専ら使用するカートリッジ式銃『ノア』も希紗の手製で、照準グラスと連動している。実は愛用のリボルバー式マグナムもあるが、希紗の前では使いたがらない。

冷静で寡黙、他人の感情に鈍く、時に冷酷でもある。プライドが高く、遼平の挑発にのることもしばしば。慎重で、人間不信な面もあるが、根は生真面目で頑固。笑うことは滅多に無く、人間に興味無し。遼平とは犬猿の仲。

安藤 希紗…20歳

茶髪、ポニーテール。やや茶色の瞳。裏警備会社LK中野区支部の社員であり、メカニッカーであり、紅一点。

巡回などより監視室での監視、警備員の装備品の制作、監視システムの改良などが主な仕事。非戦闘員だが、彼女の支援なくして支部社員は戦えない。

明るく常に元気で、チームメンバー曰く『遊び心の塊』。どんな状況でも空元気で突き進む、支部のムードメーカー的存在。過去のトラウマにより、拳銃を恐れている。実は、少女っぽく繊細な一面も。彼女の自称『女の勘』は時に驚異的に的中する。密かに澪斗を気にしているらしい。

「裏警備会社 Lose Keeper」

『裏社会』……近未来日本の、犯罪が絶えない無法地帯。そんな社会に、『守護』を仕事とする変テコで一流な警備会社、それが『ロスキーパー』。

これは、影を背負いながらも『守護業』を貫く、おかしな人間達の物語。。。

PL『いつかの悪夢』(1)

依頼7《生者への鎮魂歌》セイジャヘノチンコンカ

PL『いつかの悪夢』

垂れ流された油が、むせかえる程異臭を放つ。

……熱い。

強打して痛めたらしい腕も気にせず、もう片腕で彼女の手を握っていた。全力で引いているのに、細いその手は全く動いてくれない。「っ、くっ……」

小さな炎が、俺の感情を弄ぶようにじわじわと迫る。

(何故こんな……っ)

そんな思考が離れないが、今は疑問を感じている場合ではない。弱っていく彼女の手を、ありったけの力で握り締めた。

必死に広い周囲を見渡して、一瞬だけ、闇以外のモノを目が捕らえる。

顔が闇に支配されていてよく見えない……男だ。狼の入れ墨がされた手の甲には、銀色に光る銃。俺と目が合ったように思った時には、逃げ去っていった。

「待てっ！」

追おうとして、自分が握っていた手を思い出す。駄目だ、ココを離れるわけには……！

「……は……やく、」

「しつかりしろ！」

苦しそうな彼女は、聞き取りづらい微かな声で、何かを伝えようとしてくる。潤んだ瞳をこちらに向けて。

「おねがい……逃げて。はやく」

「馬鹿を言うな！ 死にたいのかっ」

彼女は、俺の腕を振り払って口を開いた。次の言葉に、ただ目を見張る。その時、驚きと、怒りと……悲しみが絡み合って幼い思考を掻き乱した。

身体を押さえられ、後ろに引っ張られていく。その力に精一杯抵抗しながら、遠ざかっていく彼女へ腕を伸ばし、俺は溢れる感情に絶叫するしかなかった。

「春菜<sup>はるな</sup>あああー！！」

半分は自分の叫びで、目を覚ました。

横向きになって寝ていた身体を起こすと、冬だというのに汗でシ

シャツが濡れている。自然と鋭くなってしまふ瞳で、ベッド脇の時計を確認してみれば、まだ早朝の四時。立ち上がって窓のカーテンを引くが、当然、外は暗かった。

「……………」

汗で濡れたシャツの不快感と、それ以上の夢見の嫌悪感に、漣斗は窓に半透明に映る己の顔を睨む。その行為が何の改善策にもならない事を知っていながら、それでも自分の表情ごと闇の空を睨み続ける。

久方ぶりの、あの悪夢。己を戒めるような、本来の姿を思い出させるような、いつかの幻。

逃れえぬ、忘れえぬ、人殺しの宿命。

しばらく立ち尽くしていたが、冷えてきた身体に我に返り、窓に背を向けて部屋を出ていく。

光昇らぬ空は、あの日の男の心と同じ、絶望色。

PL『いつかの悪夢』(2)

「あれ、なんやもう澪斗来てたん？ 今日早いなア」

「……………」

いつもは一番に事務所に来る真が、先に席に着いていた澪斗に声をかける。が、澪斗は黙ったまま視線さえ合わせない。

「どうしたん？」

「……………」

腕を組んだまま、じっと目を伏している部下。何かに気付いて、部長は追及を止めた。

真は知っていた。時折、澪斗がこのように《昔》の状態に戻る日があることを。

支部が創設されてから間もない頃の澪斗は、いつもこんな感じだった。何も喋らず、独りで何かを考え、そして誰より冷たいオーラをまとつ。そのオーラは空気さえ支配し、他の干渉を一切許さない……………徐々にその空気が和らいできたのは、いつ頃からだったろう。言えばきつと本人が怒るので口にはしないが、性格が丸くなってきた。一応、これでも、だ。

が、まるで何かを思い出したように、ふと《あの頃》に戻る日がある。感情に支配されることの無い澪斗が、だ。きつとよほどの事があるに違いないが、それ故に原因を尋ねることが出来ない。

……………そして……………何故だろう、真は、この空気が懐かしい。思い出せないが……………確かに、どこかで経験している、ずっと前に。

その空気と沈黙を守ったまま、三十分ほどが経過する。居座りづらいが苦という程でもないのに、真は適当にファイルの資料でも読んでいた。やがて、希紗が出勤してくる。

「おっはよー！」

「おはよう、希紗」

少し間をあけて、希紗は事務所内の空気に気付く。一つの空間を、自分のオーラの空気で支配できるのだから、いろんな意味でスゴイと真は苦笑して思う。希紗はこういった空気が苦手なので、「コンビニでお昼買ってくる」と言い訳を作って出勤直後に事務所から出ていった。

「んー……」

別に澁斗に非は無いのだが。注意するようなコトではないけれど、この空気の元凶は明らかに澁斗だし。数日経てば元に戻るけれど、その間、支部の空気が……。

結局考えるのを諦めて、真はこの空気に従順することにする。他のメンバーには、なんとか誤魔化そう。

おそらく相当寄り道してきたであろう希紗が戻ってきたが、遼平達が出勤してくる気配は無い。(連続遅刻一ヶ月記録まで、あと四日……)と、部長はデスク上カレンダーの今日の部分に赤ペンでバツ印を書く。

この記録を達成したあかつきには、二人に『女装したまま丸一日東京中を練り歩く』という極刑を下してやるつもりである。

ちなみに、この記録は別に新記録というわけではないので……つまりこの刑は既に二人も経験済みなワケで。あの時、遼平は既に妖

怪と化していて、確かにある意味《鬼》だった。純也はというと……一日中男からナンパされまくったらしい。外見は可愛らしい少女そのものだったからか。後日談によるとストーキングにまで遭ったらしく、本人は涙目で「男らしくなりたい」と嘆いていた。

……そんなこんなと考えている内に。

「うをおおおー！ やべえーっ！」

相も変わらず乱暴にドアを蹴り開け、遼平達が出勤（及び遅刻）をしてくる。事務所の入り口で息を切らして膝で両手を支えている二人の頭を、真は軽くハリセンで叩く。

「はい遼平と純也遅刻。残り四日で再び《例の極刑》が執行されるまゝす」

「ちくしょーっ、悪夢だっつー！」

「もういつそのことココに泊まるかア？ なア、《遼子ちゃん》？」

「やめろっ、その名で呼ぶな！ 自分で言うのもなんだが、アレは人間じゃねえ！！」

「確かに、私も二度とアレは見たくないわ。純子ちゃんはカワイイけど」

「やめてよ、もうスカートは履きたくないよあ……」

「なら遅刻すんなや」と真は苦笑する。少しは効くかと思ったのだが、再発防止としては不完全な刑だったか。今度はもつとスゴイ（ひどい）刑を考えようか？

「……………」  
「あ？」

いつもならここで、「愚かな貴様にはお似合いだ」とか言ってくる人物が今日はまだ一言もけなしてこないのを不審に思い、遼平は澪斗を確認する。まるで何も気付いていないように、男は瞳を閉じて腕を組み、黙っていた。事務所が、妙な沈黙に覆われる。

「澪君…………？」

「どうしたよ紫牙、いつもの唯我独尊的セリフはどうしたあ？ 風

邪か？ バーカ」

「……………」

遼平らしい子供のような言葉に、一度瞼を上げて彼を一瞥するが、澪斗はそのまま何も見なかったように目を伏せた。その軽蔑しきつたような態度に、不意を突かれながらも遼平は怒る。

「てめえバカにしてんのか！？ ンだよ今のっ」

「遼っ、そんな言いがかりみたいなのやめてよ」

「……………」

「……………ちっ、調子狂うぜ」

まったく動かない澪斗に、吐き捨てるように言う。そんなふてくされた遼平とも、全員が席に着こうとした時。

あまり聞かない電子音が、事務所端の棚の上にあるファックスから鳴り響く。今時ファックスなど、滅多に來ないのに。一応中古品を置いておいて正解だったか。

「何やる、また金貸し業者か？」

軋んだ音を立てながら、ファックスが一枚の紙を吐き出す。その

紙を受け取り、ざっと紙面を読んで……部長は硬直した。

「なにバカみてえに口開けてんだよ、真」

「い……依頼が……」

「依頼だったの？ どーせまたロクなのじゃないんでしょ？ わか  
ってるって」

「こ……こご、この依頼……！」

ガタガタと小刻みに震えながら、ぎこちなく真は振り返って紙を  
指差す。その顔は薄笑いが引きつったような、奇妙なものだった。

「マトモやアーっ！ しかもめっさデカい……！」

「……えええーっ!?」「……」

(澪斗を除き)全員が総立ちになる。警備らしい仕事などほとん  
ど来ないと、皆覚悟していたので、予想外の言葉に動揺していた。  
折角警備なのだから喜ばしいのに、第一反応が『驚愕』とは……  
なんとも悲しい。

「しかも聞いて更に驚けっ、クライアントはなんと、あの大富豪『  
氷見谷』や!」

「……おおっ」「……」ともう一回驚きの声。「そんな、まさか……」  
という純也の言葉も不思議は無い。

大富豪『氷見谷』といえば、遼平さえ知っている、有名な巨大企  
業のトップを占める富豪一家である。化学、生物工学分野で発展す

る『ヒミヤ産業』は、海外にも広く知れ渡っている、日本の三大企業の一つ。

「ちよ、ちよつと真君見せてっ」

半ば呆然としている真から、ファックス用紙を受け取る。あんな大富豪から、こんな小さな支部へ依頼が来るとは思えない。悪戯か何かではないか。

「えつと……、

『裏警備会社ロスキーパー中野区支部御中。この度、私どもヒミヤ生物工学開発部より、警備していただきたい物があります。我が開発部の研究成果のディスクを、護っていたくださいのです。警備規模はそちらにお任せしますので、どうかお願いします。日程と場所は下記の通りです。尚、この依頼はご内密にしてください。』

ヒミヤ生物工学開発部部长より』

……だって。すごいや、これ本物だよ！ ほら、ココに判子が

「

そう言いかけて、純也は目の前に立った人物に紙を奪い取られる。

……険しい表情の、澪斗に。

「れ、澪君？」

「……」

純也を見下ろすその瞳が、まるで敵を相手にしたように鋭い。その視線に純也はたじろぐ。こんな風に睨まれたことは、一度も無いからだ。何か悪いことをしただろうか、と少年は自問するが皆目見当がつかない。

「……………この依頼は、引き受けない」

「え？」

「キャンセルしろ。厄介な依頼に違いない」

「何言つとんのや？ 折角のデカい依頼なのに……………」

「そうよ、厄介な依頼なんていつものコトでしょ？」

「黙れっ！！」

その剣幕に、四人は一瞬気圧される。俯いて叫んだ澪斗は、淡緑の前髪で表情が見えない。

「な……………っ、なんだよ紫牙！ てめえ今日おかしいぞ！」

「……………」

僅かに怯えた純也の横に立ちながら、澪斗はまた黙り込む。そして、ファックス用紙を何度か破ったうえで真新しいシュレッダーに押し込んでしまった。

「あっ……………」

「澪斗っ、あんた何を！」

「……………氷見谷には、関わるな……………」

低い、だがしつかりとした声で、それだけ言って澪斗は事務所から出ていった。困惑や呆然といった表情の、四人が残される。

「澪斗……………？」

「ああ、依頼がアア……………」

「おい純也、大丈夫かよ」

「う、うん……。でも……漣君が……」

まだ怯えているような純也に、「紫牙が？」と尋ねる。足下を見つめていた純也は、残った三人を見上げて告白するように口を開いた。

「漣君……ずっと震えてたんだ……」

## 第一章『迷宮の探索』(1)

### 第一章『迷宮の探索』

白く巨大な門を前にして、眼鏡を外した淡緑髪の男は独り、深く息を吸う。周囲に見える物といえば、大きい門と、その両脇の高い壁と、前後に生い茂る森のような木々。

腕時計の針がちょうど午前十時を示した時、門が開いて中からリムジンが出てくる。その運転席から、タキシード姿で両手に白い手袋をする、細身初老の男性が降りてきた。

「……………裏警備会社ロスキーパー中野区支部、紫牙澪斗様……………で、よろしいですね？」

「そうだ」

重々しく澪斗は頷く。男性は、深々と頭を下げた。

「ようこそ、氷見谷へお越し下さいました。……………はて、後ろの方々はどうぞされました？」

「なに？」

怪訝な表情で澪斗は振り返る。『後ろの』とは？

「あっ、早速バレちゃったよ」

「俺様の完璧な隠れ身の術が……………」

「って、ただ単に木にくつついてるだけじゃない」

「ども、そこの社員の上司です」

背後の木々や植え込みから聞き慣れた声がして、やっぱり見慣れた金髪の男の顔が逆さまに木の葉の茂みから出てくる。

「貴様ら……」

何の躊躇もせず、澪斗は男の顔がぶら下がった木へ発砲し、隣りの巨木を蹴りし、向かい側の木の不自然な茶色の幹へ実弾を打ち込む。

「うわっ、危なっっ」

「きゃ〜っ」

「痛っ」

「うをつ、いま弾が掠ったぞ!？」

ドタンっ、ドシンツと、情けなく人間が木から落ちてくる。最後の紺髪の男など、向かい側の木に茶色の布で張り付いていただけだ。

「いたたた……。何すんねん澪斗っ！折角『おもろいストーリーカ』

ごっこ』してたんに！実弾ぶつ放すやつがあるかアホ！」

「阿呆は貴様らだ！一体ココで何をしている!？」

「いや、だから『おもろいストーリーカ』ごっこ』を……」

「あの、澪斗様、そちらの方々は……」

突如始まった警備員達のコントにも動じず、初老の男性は和やかに問うてくる。澪斗は、ぎこちなく揺れて「少し待て」と振り返り、

四人を後ろへ引つ張っていった。そして大分離れた所で。

「……貴様ら、何の真似だ？」

「だア〜かア〜らア〜、紫牙漣斗くんの『おもろいストーカーごっこ』」

真は銃口を押しつけられて、言葉を続けられない。ゆっくり苦笑いで両手を上げる。

「茶化すな。どういつつもりだ？」

「どういつつもり、はこっちの台詞よ。なんで一人で漣斗はココに来たわけ？」

「……」  
「はっ、どうせ報酬独り占めにするつもりなんだろ？ 抜け駆けは許さねえ」

「……報酬など、欲しければ貴様らに全てやる。黙って帰れ」

その言葉に、遼平は眉間にシワを寄せる。ココに来たのに、報酬がいらぬとはどういふことなのか。

「言っただ。……氷見谷には、関わるなと」

「あんたは関わってもエエのに、か？」

「いい気になってんじゃねえよ。誰がてめえの指図なんかに従うかっつての」  
「……」

厄介なモノに対したように、漣斗は苦々しげに四人を見やる。そして、脅すように「帰る気はないのか」と問う。

「ここまで来て、帰るわけにはいかへんなア」

「大富豪氷見谷家つて見てみたいし」  
「意地でもてめえの思い通りにやさせねえ」  
「一緒に仕事をさせてよ澪君」

結局全員に断られ、零れる深いため息。澪斗が観念したようなので、遼平達は門の方へ歩いていってしまっただ。

「……ここまで愚かだとは思わなかったぞ」  
「そりゃ悪かったなア、ご期待に沿えなくて」  
残った真に、小さく言う。二人は希紗と遼平、純也達の背を眺めていた。

「何だかようわからんが、あんたの目的は邪魔せんよ。だから……  
……そんな死地に赴くような顔せんといてや」

冗談めかして笑う真の声に何故か懇願を感じたのは、澪斗だけなのか。

「俺はそんな顔をしていたか」  
「なんとなくな。古い仲間か」  
「……フン、迷惑極まりないな」  
不機嫌そうな澪斗についていって、リムジン前まで集まる。

「えーっと、改めまして、ワイらがロスキーパー中野区支部です」

「はい。私は、旦那様『氷見谷 勝人』様にお仕えする執事の『豊』

臣』と申します。私が開発部までご案内させていただきます」

いかにも執事風な初老の男性は、礼儀良く頭を下げて五人をリムジンに乗せる。車は一度後退し、向きを変えて門の中へ入っていく。向かい合ったりリムジンの座席で、純也達がきよきよると物珍しそうに物色していると、澗斗が口を開いた。いつの間にか、いつもの眼鏡をかけている。

「……ところで貴様ら、何故ココの場所がわかった？ あの紙は俺が処分したのに……」

「ふっふっふ、澗斗、あんた重大なコトを忘れとるで」

「なんだと？」

「あのね澗君、悪いんだけど、あの紙を僕暗記しちゃったんだ」

「それですか」と納得した表情になる。純也は、一度見た物、知った事はほとんど忘れないという驚異の記憶力を持つ。それが記憶喪失故の能力なのかは、わからないが。あの僅かな時間、一回見ただけで、全てを自然に覚えてしまったのか。

「でも驚いたよ、ヒミヤ産業の生物工学開発部って、氷見谷家の敷地の中にあるんだね。埼玉県にまで来るとは思わなかったなあ」  
「ロスキーパーって『さいたま支部』もあるんに……なんでワイらのトコに来たんやろな？」

「その件は、開発部部长様から直接ご説明があるかと存じます。それと先程のお言葉にお答えしますと、正確には今回の依頼の開発部とは、『特殊生物工学開発部』という企業秘密の部署なのです。ですから、氷見谷家の本邸内にあるのですよ」

執事豊臣の説明に、「へえ」と感嘆の声をあげる。裏社会の警

備会社に依頼するとは、よほどの企業秘密に違いない。

ふと、ずっと窓の外を見ていた希紗が首を傾げる。

「豊臣さん、ココつてもう氷見谷家の敷地の中なんですよ？ どうしてお屋敷が見えてこないんですか？？」

「もうしばらくいたしますと、奥様のお屋敷が見えてまいります。そこから隣りに、旦那様のお屋敷。それより奥には旦那様のご兄弟のお屋敷が……」

「え、あのつ、家族で家がバラバラなんですか？」

「はい、最奥の本邸にも旦那様方の個人部屋がありますが、その他に皆様のお屋敷がございます。本邸は、門より直線距離にて二キロ先でございます」

「そ、そうなんですか……」

（流石は日本トップクラスの大富豪……）と警備員達は啞然とする。こんな広大すぎる庭は、見たことがない。家の敷地内に、一本の大きな二車線道路があるのだから。

やがて、一際巨大で豪勢な屋敷の前に着く。首を回さないと全貌を把握できず、現代に立つ城のようだ。左右の庭に大理石の噴水、整備の行き届いた花畑。

「おつきい！ きれい！ すつきい！！」

「希紗、感想が小学生並やで」

「でも、本当にそんな感じだよ」

「おいおい……これデカすぎねえか？ 個人の所有物でいいのか？ 国会議事堂くらいねえか？？」

本当にここは日本なのかと、目を疑った。金はある所にはあるのだな……としみじみ思いつつ、執事豊臣の案内で屋敷に入っていく。内側からメイドに玄関を開けられて一歩踏み入ると そこは、

屋外より遙かに明るかった。

落ちてきたら軽く中野区支部を全滅に陥らせそうな、馬鹿でかいシャンデリア。虹色にキラキラと反射しながら、ホールを照らしまくる。そして、どこからともなく流れてくる優美なクラシックミュージック。警備員達が知っている世界が……次元が違う。

「うおおっ、眩しいっ！アレ太陽より眩しいぞ!？」

「遼っ、遼っ、なんか天井に天使の絵が!！」

「この音楽は何なの!？ベートーベンっ？ゴッホ!？」

「……希紗、ゴッホは画家だ……」

「………なア、『場違い』っちゅー言葉は今のワイらのためにあるのかなア？」

まさにその通りだろう。薄汚れた制服が、それをより一層際立たせる。

「どござ、こちらでございます」

こうして見ると、豊臣はこの場の中に全く違和感無く溶け合っている。丁寧な仕草で、ホールの奥の通路を腕で示した。

赤い絨毯が敷かれた、大理石の廊下が長く続く。囁くように流れてくるクラシック以外、何も聞こえない上品な静寂。屋敷にはまるで人氣が無く、喧噪に慣れた遼平達をそわそわさせる。

「あの……このお屋敷にはあんまり人がいないんですか？」

沈黙に耐えづらかった純也が、半分は好奇心で尋ねる。豊臣は僅かに振り返って、微笑みで答えた。

「いえ、今の時間でしたら、従業員約百名程度と、旦那様がいらっしやいます」

「氷見谷勝人……様？」

「はい。ご存じかとは思いますが、旦那様はヒミヤ産業の社長でございます。本社も埼玉にあります。今日は旦那様は本邸にいらっしやるのですよ。……あ、それと……」

思い出したように執事が言葉を続けようとした時、無限に続くのではと思わせた回廊の先に人影が見えた。華やかな赤いドレスを着た黒髪の女性が、二人のメイドを連れてゆっくり歩いてくる。

「奥様、おはようございます」

「ああ豊臣、お早う。……そちらの方々は？」

優雅に歩いてきた女性は、奥方らしい。品の中にもどこか厳しさを持ち合わせた四十代ほどの女性が、真達を見て首を傾げる。

「特殊生物学開発部部长様がお呼びになった、警備員の方々でございます」

「……アレが？」

『部長』という言葉が出た途端、奥方の顔が険しくなる。どうやら『アレ』という言葉は真達に向けられたモノではなく、その部長を指しているらしい。

「ど、どうも……私どもは……」

「っ、貴方！」

真が支部長の責任として名乗ろうとした時、不意に奥方は驚愕の声をあげる。身を乗り出してきて、真の横を通り過ぎて。

「そのこの貴方！ 名乗りなさいっ！」

澪斗を強く指差し、奥方は恐怖そのものを前にしたように叫ぶ。

その言葉で……いや、正確にはその瞬間澪斗から放たれた異様な  
気で、仲間に電撃が走っていた。

## 第一章『迷宮の探索』(2)

真達は驚きと混乱に襲われるが、澪斗が機嫌を悪くして銃を手にしないか咄嗟に心配した。

澪斗はふつと目を閉じる。そして、一步前に出て深々と腰を曲げて頭を下げた。

「私は、警備会社ロスキーパー中野区支部正社員、紫牙澪斗と申します。本日は特殊生物工学開発部部长様に依頼を受け、参上した次第であります」

うやうやしい響きを込めた、前代未聞のその声色。ずっと上がらない彼の頭を、全員が目を見張って直視していた。

「そ……そう……、そういうことね、アレの仕業なのね。このようなふざけた真似を……。これは勝人様にもご報告しなければ」

動揺を隠し切れていない奥方が、一步たじろぎ、執事を睨む。執事は深く深く頭を下げた。おろおろと、残された警備員達はどう対処していいか困る。

「豊臣！ アレにすっかり言っておきなさい！ ……下賤な者を氷見谷に入れるなど！」

肩を怒らせて、奥方はホールの方へ去っていった。その後をそくさとメイド達が追う。間を置いて、ゆっくり澪斗は体勢を戻し、前髪を払った。

「……今のお方が、旦那様の奥方様、氷見谷蘭様でございます。本日旦那様とお会いになるご予定がありましたので、本邸にいらっしやっただのかと存じます」

「は、はア……」

「おい、ゲセンってどーゆー意味だ？」

「うーん、知らない方がいいと思うよ」

「ねえ澪斗、どしたの？ 流石の澪斗も大富豪には敵わない？」

好奇と僅かな驚きも含めて、希紗が澪斗に問う。言葉の後半は皮肉も入っていた……。のに。

「貴様の言うとおりだ。俺はあの場での最善の策をとったまで。……大富豪には敵わん」

肩をすくめて言う澪斗が、らしくない。まるで冗談を言っているようだ。澪斗はふざけたコトは言わないし、しない。いつでも全力投球で、相手が子供だろうが女性だろうが……それこそ大富豪であるのが躊躇い無しに発砲する。その澪斗が。

「皆様、お気を悪くしないでください。奥様は警戒心のお強い方なのでございます」

「あははー、こういうのは慣れてるんで、大丈夫ですよ」  
特にフォローするわけでもなく、真は首を振る。実際に、こういった対応をされるのはよくあることなのだ。ただ、流石にいきなりの指名には驚いたが。

引き続いて、豊臣は何事も無かったように案内を再開する。T字路になり、左右の通路と正面に両扉。「こちらから参ります」と、先頭を歩いていた遼平へ両扉を指す。

それに従って真はゆっくり扉を押し開け……冷やかな風が、彼の金髪を優しく舞い上げる。

「……は……？」

部長の啞然とした間抜けな声。純也達が何事かと首を覗かせた時、室内から『カコーン……』と澄んだ音がした。

そこに広がっていたのは……川が流れる日本庭園。

「お……おい、ココは関東だよな？」

「っっていうか、むしろ屋内のはずだよ……っ？」

「どうして川が流れてるの!? 水車とかあるわよっ!？」

「『ししおどし』まであるで……! この扉はどこもドアか!？」

「真、貴様その単語は今の人間にはわからんぞ……」

庶民（もしくは貧乏人）らしく、眼前に広がる部屋に興奮する警備員達。執事豊臣が、当たり前のようにスタスタと日本庭園の中へ歩みゆく。「どうぞ、お入りください？」と促され、恐る恐る石畳の道に足を乗せる。空気はヒンヤリとしていて心地よかった。

「旦那様は大変和風庭園を好んでおられます、ここは旦那様の趣向によりこのような体裁になっているのです」

「あー、開発部のお部屋のほうは……？」

「はい、この部屋を真っ直ぐ通過した方がより近道ですので、ここをご案内させていただきます。この部屋を迂回してまいりますと、二十分ほどの遠回りになりますか？」

「……喜んで通過させていただきます」

小川の流れる涼やかな音と、水車の回る響き。マイナスイオンが含まれているであろう爽やかな風。時折落ちるししおどしが、何度も『カコーン……』と趣深い声を立てる。……まさに、純日本庭園。豪邸の中の異世界を歩くこと十分ほど、取って付けたような不自然さで、やっと先程と同じ両扉が現れる。その直前には、川の上流であろう滝まであった。

扉をくぐると、再び赤い絨毯の廊下。左右から通路が合流しているのを見ると、どうやら先程の別れ道はここで繋がっているらしい。確かに、あれだけの規模の部屋を迂回すれば、二十分以上余計にかかりそうだ。

「旦那様が趣向を懲らされたお部屋は、楽しんでいただけましたでしょうか？」

「はい……一時的に現代社会にいる事を忘れました……」

「おい執事のジイさん、まだこんな部屋があるのかよ？」

「もちろん、旦那様の一族の方々、それぞれ珠玉の部屋がございます。あとは……浜辺で遊べる『渚の部屋』や、忍者体験ができる『からくり部屋』、宇宙を満喫できる『無重力の部屋』など多数がございます」

「わーっ、僕『からくり部屋』行きたーい！」

「浜辺に行きてえー」

「私は『無重力の部屋』がいい〜！」

「あんたらなア、仕事で来たんを忘れるなや。……ところで豊臣はん、後で記念写真を撮ってもエエですか？」

「もちろんでございます。プロのカメラマンが常時控えておりますので、いつでもお呼びください」

「……………もう貴様ら帰ってくれ……………」

うかれまくっている真達に、澪斗は額を押さえて深く俯く。すっかりテーマパークに来た観光客みたいになっていた。

今度は、大きな通路の側面に、左右それぞれまた両扉。執事は左の扉の前に立つ。

「この扉からずっと真つ直ぐ行った場所が、開発部研究室でございます。私はここで待機しておりますので」

そう言って、豊臣は扉の脇に背筋を伸ばして綺麗な直立姿勢になる。澪斗が何か言おうとしたが、その前に真が扉を押していた。先に入ってしまった四人を追って、澪斗も部屋に足を踏み入れる。

「え……………なんやココ……………!？」

室内からの閃光に目を閉じ、明るさに慣れてきて瞳を開けた時、  
またもや驚かされた。

まさか、そんな、有り得ない、このような  
ヤングルなんて。

密林のジ

## 第一章『迷宮の探索』(3)

高い湿度と室温、遙かに高い天井に吊された赤外線ライト、見渡す限りの熱帯林……。遠くから「キキキ」とか「キュウウ」など、獣や鳥の鳴き声。更に飛び交う鮮やかな色の蝶。

「ヤバイ……なんかワイ、ストレスの溜めすぎで幻覚が見えてきたっばいわ……」

「えっ、コレ幻覚なの！？ どうしよう、僕にもアマゾンらしきモノが見えるんだけど！」

「……俺も見えるぜ……。気が合うな、俺達……」

「ちょっと、四人揃って同じ幻覚なんて見るわけないでしょっ！ つまりコレは……！」

「現実、か……」

目を逸らしたい現実が、容赦無く襲いかかってくる。軽く三十度は超えるのではと思わせる気温が、真冬の日本にいる警備員達に汗をかかせた。

「み、みんな落ち着け。焦るな、落ち着くんや。とと、とりあえず記念写真を……」

「あんたが一番落ち着きなさいっ」

混乱してあたふたしている真を、一発叩いて希紗が制止させる。

振り返って両扉のドアノブを引く遼平が、「おい扉が開かねえぞ！？」と状況悪化を知らせてくる。

「豊臣さんの言ってた通り、真っ直ぐ行ってみようよ？ 生物工学開発部なんだから、これぐらいアリなんじゃない？」

「おい純也、なんかこの環境に慣れてきてねえか？」

「子供は順応が早いからな……」

どことなく楽しそうに見える純也を先頭にして、五人はジャングールを進む。だが『真っ直ぐ』といっても整備された道など有るはずもなく、やがて目の前が、鬱そうとしたツタと木に囲まれた。

「本当にこの先に開発部があるんかア〜？」

「というより、人がいるのかしら？」

「あれ？ なんか草むらが動いてるよ………？」

不穏な音で、前方の草むらが大きく揺れる。その奥の草陰も同時に動いて……殺気に近い戦慄を感じる！

「下がれっ！」

「キシヤアアアアア！」

跳んで後退すると、直後に巨大な口が出てきて空振りする。そのまま頭を上げたのは……人間の顔二つ分くらいある頭の、へび……！！

「ぎゃ〜っ！ 何アレ〜！！！」

「嘘やる……大蛇がなんでこんな所につ」

「なんでも何もつ、ココがジャングルだからじゃん!？」

「……それ以前に埼玉なのだから……」

後ずさりする警備員の中で一人、動かない者がいた。舌を出した大蛇と、目を逸らさず睨み合う人物が。

「遼つ、危ないよ!」

「……ほお、やってみるよ」

「え?」

その言葉はこちらに向けられたものではないようだった。まるで……へびと話している?

「シヤアアア……!」

「へっ、来てみるよ……!」

じりじりと、一人と一匹は間合いを計る。威嚇し合っている?

「……なア純也、遼平はへびとも会話できるんか?」

「え……さあ……。へびって超音波は使えないと思うんだけど……」

「おそらく野生の本能というやつだろう」

「脳の構造が近いのよ、きっと」

野生の本能が鋭くないと自覚している四人は、素直に遠くまで後退し、異種族格闘戦の傍観者となる。その試合の実況中継を真が、解説は純也が務める。……誰に對してかは不明だが。

「さア始まりました、世紀の決戦! ヒトVSへび! 実況はワイ、霧辺真が務めます。解説はおなじみの純也です。……さて純也、あのへびは何ていうやつ?」

「あれはニシキヘビ科ボア亜科ヘビ、『アナコンダ』だね。世界最大のヘビだよ。主に南アメリカ熱帯に生息してるんだ。僕も実物を見るのは初めてだなあ」

「なるほど。……それではそろそろ試合が始まるで！ えー、青コーナー、『東京で最も野生に近い男』ッ、蒼波遼平〜！ 赤コーナー、『キング・オブ・スネーク』ッ、アナコンダ〜！」

「わあああ〜！」と希紗が一人で喚声を出して盛り上げる。漣斗は呆れを通り越したのか、しゃがんで適当に草をむしり始めていた。

希紗がスパナをぶつけ合って試合開始のゴングを鳴らす。まだ首しか見えないアナコンダが、再び顎をパツクリ開けて迫ってきた。ヘビの頭の上を、宙返りして遼平は飛び越える！

「……あ、僕言い忘れてたんだけどー」  
「何を？」

「アナコンダは、全長が約九メートルあります」

地鳴りの轟音を立てて、宙に浮いた遼平の身体を草むらから出てきたアナコンダの尾が叩き落とすっ！ 草が無造作に生えている地面へも叩き付けられるが、次の尾の一撃は転んで回避する。

「純也あーっ！ お前っ、そういう事は早く言えええー！」  
「遼、ファイトあ〜ッ」

「おおっと予想以上にアナコンダは巨大や〜！ 遼平、そこをどう出るー!? 流石の蒼波一族も、ヘビの王者の前には屈してしまうの

「かア〜!?!」

真の実況が熱くなる。へびに殴りかかる遼平の遙か後方で、警備員の観戦は続く。

「おらあああーっ!」

「キシユウウウ〜!」

長く太い尾を蹴り飛ばすと、遼平の首もとに後ろから鋭い牙の口が迫る。堅い鱗で覆われた顎ごと、アナコンダに渾身の左アッパーを喰らわせて、太い胴体に跳んで乗る。

振り払おうと、アナコンダは激しく身体をうねらせる。飛び降り、距離を置いて着地して、一人と一匹は最後の一撃にかけるべく精神を集中させ始めた。

「これで終わりだ!!!」

「シャアアアア!!!」

鈍い音がして、一瞬でぶつかり合う。アナコンダの巨大な牙が遼平の右肩に突き刺さり、遼平の左拳がアナコンダの心臓の位置を強く打っていた。間を置いて、ゆっくり崩れ落ちていく大蛇の頭。

「…………し、試合終了ー! 大番狂わせっ、勝者は蒼波遼平ー!!!」

「うっしやあ! 俺様に勝とうだなんて一万年早えんだよっ、喰うぞウナギ野郎!」

「いや、アナコンダだし。食用じゃないし。依頼人の動物だし」

「うっん、見応えのある勝負だったわ〜」

制服の右肩の部分に二つの穴を開けてしまった遼平が、アナコンダに片足を乗せて煙草に火をつける。

「勝者ヘインタビューしまーす。……遼、本気だったでしょ？」

「あ？ そうだったか？」

そこらの三流を相手にするより、よほど本気だったと思う。瞳の色が違うのだ。

「よし、次が出てこないうちに行くぞ」

「行くつて、道も無いのにどうやって？」

「『獣道』だよ。こいつが出てきた場所から気付いたんだが、この部屋を進むには獣道に行く以外ないだろ」

「で、でもさ、獣道なんてどうやって見つけるの？」

「は？ どうやって、も何も、ココにあるだろうが？」

言つて、当然の如く遼平は密林の方向を指差すのだが……純也達には、やっぱりただの密林にしか見えなくて。遼平は不思議そうに首を傾げる。

「お前ら、ドコに目をつけてんだ？」

「……真君、獣道が見える？」

「ワイにも見えへんよ……っっていうか、たぶん人間に近い生き物には見えへん道なんやろ。だから、遼平にだけ見える」

「……理解したくないけど、物凄く納得できたよ」

同居人の脳が、理性より圧倒的に本能が強くなっていることに、知つてはいたが哀しくなる。現代の東京に住んでいて、どうして獣道が見えるようになるのだろうか。

「澆斗ー、先進むわよ」

「勝負は終わったのか？」

全く試合を見ていなかった澆斗が、顔を上げて立ち上がる。いつの間にか本気で一心不乱に草むしりをしていた澆斗の周囲半径五十センチが、綺麗に除草されていた。

「……私が言うのもなんだけど、そんなに暇だった？ 一応同僚が生死を賭けて戦ってたんだけど」

「なんだ、蒼波は死ななかつたのか？ 惜しかったな……」

「いや、そんな本気で悔しそうな顔されても」

生真面目な澆斗の性格からいって、きっと適当に始めた除草作業に、いつからか全力を尽くしたに違いない。根の部分から丁寧に引き抜かれている。……遼平の死をささやかに祈りながら。

「置いてくぞー」

野生の勝者、遼平を先頭に再び警備員達はジャングルを進み出す。

## 第一章『迷宮の探索』（4）

煙草をくわえながら草をかき分け、遼平が進んでいく。途中で木の上にチンパンジー、沼にワニ、砂地にエリマキトカゲなど……熱帯地方でサバイバルをしているような気分を否応なく存分に味わされた。

「熱いよ」

「少し休憩するか……」

僅かに開けた場所で、五人は休む。どうして自分達がこんな所にいるのか忘れかけた頃、遼平が吸い終わった煙草を投げ捨てた。

「ダメだよ遼、ポイ捨てしちゃ」

「いいだろ、いい加減こんなトコ腹が立ってきたんだよ」

「でも火事になったりしたら……」

「はっ、そうなら見渡しがよくなるかもなあ」

「冗談混じりで遼平がにやついた時、何か唸るような低音の音がした。その方向へ、五人はゆっくりと顔を向ける。

「……何やる、今ワイの中で、超特大緊急警報発令中……」

「奇遇だね、僕もだよ……」

ぎこちなく立ち上がり、じつと草むらの方から目を離さない。ふと、二つの点が光ったと思うと。

「ガアアアアアア……」

「で……っ、」

飛び出してきて、五人の前で怒り狂う獣……額のところに遼平が投げ捨てた煙草が乗っかっている、百獣の王　ライオン！

「出たアア　　っ！！」

一斉に警備員達は走り出す。もちろん、その後ろをライオンが追ってくる！

「蒼波っ、土下座して謝ってこい！」

「謝る前に普通に喰われるだろうがっ」

「その間に俺は逃げる」

「てっめえー！」

こんな非常事態も賑やかな中野区支部。罵声は続く……。

「きゃ〜っ、私は美味しくないです〜！　食べるなら他の人でっ！」

「えっ、僕も小さいから食べごたえないよっ！」

「緑色の頭したヤツは美味いらしいぞっ」

「貴様どこの基準だ！」

「嫌アアア！　こんな所で痛く死にたくない〜！　ユリリ〜んっ

っ！」

無我夢中で、必死に全力疾走。本来ライオンは持久走が苦手なはずだが……猛スピードを緩めることなく咆吼しながら駆けてくる。

「ココって熱帯だよなっ？　なんでライオンがいるのさ!？」

「そんな、ワイに訊かれても……」

「こうなったら遼平！　第二ラウンドはVSライオンで!」

「また俺かよ!？　今度は紫牙でいけよ!」

「何を言う、貴様が野生担当だろうっ!」

「いつそんなのが決まったんだ!？」

段々ライオンとの距離は縮まっていく。高い温度に体力を奪われているのも要因の一つだが、裏の人間を追いつめるほどライオンの体力は尋常ではない。

「キヤー！　来てる来てるうっっ!」

先頭を走る一番逃げ足の速い希紗が、振り返ってライオンとの間隔を目測する。その後ろを真と澪斗、更に背後に遼平と純也がいる。

「遼平っ、会話の余地はあるか!？」

「あるわけねえだろ!　さっきから『裂く!　殺す!　喰う!』としか聞こえねえよ!」

「うわア、もうどうすんねん!　何でもエエから誰か状況を打破できんかっ?」

「真!」

「澪斗!？」

横を走る澪斗が、真剣な顔で自分の右手に持ったモノを指差し、真に手渡す。

「四つ葉のクローバー」

「ああ、そうそうコレを持ってる幸せになれ……って、なれるかどうかアホお！ 幸せになる前に確実に八つ裂きじゃあ！！ こんなんドコから持ってきたア！？」

「いや、先程草をむしっていて発見した」

「真君っ、そんな軽快なノリツツコミをしてる場合じゃないよ！」

どうしてこの五人は放っておくとすぐコントが始まるのか。国内でライオンに追われる、という前代未聞の生死の狭間にいる警備員達は、状況をきちんとわかっていないのか天然か、言い争いを繰り返すばかりでどんどん体力を消耗していく。

「純也っ！ 俺は一つ手段を思いついた！」

「えっ、本当！？」

天井の赤外線ライトに照らされて光輝を放つ髪をなびかせながら、純也が遼平を見上げる。遼平は確信の顔で、「ああ」と頷いた。

「俺の記憶によれば、動物は光り物を追う習性があるっ」

「え……いや、それはたぶんカラスとかだと……」

「……純也、俺はお前を信じる！」

「ちよっ、待って！ 光り物ってまさか……っ」

とてつもなく嫌な予感が走った純也を、掴んで抱き上げる。……  
そして。

「行ってこい！ 純也ああーっ！！」

「えっ……ええええええー！？」

くるつと振り返り、思いつき振りかぶって純也を後ろへ投げ飛ばす！ 「うわああああ……！」と、段々悲鳴が遠ざかっていく……ライオンがそれを目で追い、百八十度向きを変えて純也の飛んでいった方へ駆けていった。

「……よし！」

「ええーっ！？ いや、『よし！』やないやろ！ 純也がっ、純也がっ……！」

『こうして、中野区支部の平和は保たれた。仲間達は、少  
年の犠牲はきつと忘れまいと心に誓うのであった……』

「勝手に変なナレーション入れるなア！ なにエエ話で終わらそうとしてんねん遼平っ！」

純也の飛ばされていった方向を指しながら、真が一気にまくし立てる。少年が飛んでいった上方を、希紗が手を額に当てながら見やうた。

「何てゆーか……遼平、人でなしよね」

「今頃気付いたのか希紗。俺はこいつと出会った三秒後から知っていたぞ」

「あアつ、純也が……純也がアア……」

「お前ら、いつまでも過ぎたコトを気にしてんじゃねえよ。人間、ポジティブにいこうぜ？」

「あんたはちつとでも過去を振り返れ！ そして全国の前向きな方々に泣いて詫びろ！ ソレはポジティブとは言わんっ！」

遼平の胸倉を掴んで、真はそのまま激しく揺する。あんまりだ……ここまで薄幸の少年を、真はドラマでさえ見たことがない。意思に反して犠牲にされた上、数秒後には忘れ去られようとしているのだから。

「あつ、ねえ、出口発見〜！」

「お、ラッキーだな」

「行くぞ、真」

「純也ア……頼むから祟らへんでくれエエ……」

目の端にうつすらと涙を浮かべて、真は三人についていく。入ってきたものと同じ両扉が、熱帯林に隠れるようにやはり不自然に取り付けられていた。



## 第一章『迷宮の探索』(5)

「やったあゝ、ゴール！」

何日もジャングルを彷徨ったように希紗が嬉しそうに扉を開ける……と、目の前はやはり赤い絨毯の廊下で。あまりの違和感に、自分達が警備の仕事でココに来ていた事をようやく思い出す。

「お待ちしておりました、皆様」

「あれ？ 豊臣さん？」

扉の脇に、部屋に入る前と何ら変化ないポーズのままの執事が立っていた。希紗は首を傾げる。もしかして、戻ってきてしまったのか？

「おい、どういうことだよ。俺達は確かに違う扉から出てきたんだぞ？ 開発部の部屋は何処なんだよ？」

「大変申し訳ありません、私、部屋を間違えてしまいました。こちらの部屋は旦那様のご息様の遊技場、『びっくりサファリパーク』でございます。開発部とは部屋が左右反対にあるのでございます。時折、私も従業員も部屋を間違えまして、たまに帰らぬ人となる者も……」

「ああ、ワイらの中からもそんな人が出ましたわ……」

「どうして入り口の扉は中から開かねんだよっ？」

「二つある出入り口は、それぞれ一方通行でございます。『びっくり』されたでしょう？」

「その『びつくり』かよ！ 生き死にレベルじゃねえか！」

遼平の言葉に、執事は深く頭を下げる。どんな物好きなんだ、その子息は。

「私、間違いに気付きました、この出口で皆様をお待ちしております。次第であります。どうかお許しを」

「とりあえず、早く開発部の方へ案内しろ。……もう間違えるな」  
冷えてきた汗を拭い、澪斗は先を促す。一分前の熱帯が嘘のように、廊下は冷え冷えと置いていて寒い。

「かしこまりました」と豊臣は廊下を歩き出す。やはりその姿は、背筋を真っ直ぐ伸ばした模範的な歩き。歩調や歩幅まで計算されたように同じ。

しばらく長い距離を歩いて、再びあの左右両脇に扉のある通路まで来る。今度は右の扉に案内され、遼平も忌々しげに左の扉を睨んでから、執事に続く。

また閃光に襲われるのかと警戒して入ると、今度は一転暗闇だった。「足下にお気をつけください」と言われて初めて、先が下りの階段であることに気付く。よく見えない黒一色の階段を、目を凝らしながら降りる。

一步、また一步踏み出す度に、体感気温が下がっていく。それは闇へ進んでいく心理的錯覚からなのか、本当にここだけ空調設備が行き届いていないのかは、わからない。時折ある、青い蛍光灯が、気分をより一層暗くさせる。

こんな奥にいるのは、一体どんな人物なのか。

「……こちらでございます」  
おそらく地下一階あたりだろう。今までの手動ドアではない、分厚い自動ドアが現れる。

「今度こそ本物だろうな？」

「はい、間違いございません。……今度は私も共に参りますので」  
扉の横の九まであるロックキーを、素早く豊臣は入力する。最後に青いボタンを押して、ロックが解かれた音がすると、自動ドアが横に開く。執事は「失礼します」と断って入室した。

その部屋はやはり暗かったが……右に多くの実験器具と、左に書類が多く積まれた本棚。そして中央奥に、多くのコンピュータディスプレイ。複雑な立体図や、文字の羅列が光っている。人気が多く無い。

「お待たせ致しました、部長様」

「ありがとうございます、豊臣さん。……ようこそ、ロスキーパー  
中野区支部の皆さん。そして」

執事は、礼をして一步下がる。真達はその若い声に……どこかで聞き覚えがあった。奥の深い回転椅子に座っていた人物が、背を向けたまま立ち上がる。

「久しぶりだね、澪斗」

その言葉には温かい響きが含まれていた。真達の横を、無表情で澪斗が通り過ぎ、先頭に来る。

部屋の奥には……………鏡があった。最初、真達はそう思った。だが、それが間違いであることに気付かされる。鏡の中で振り向いた淡緑髪の若い男は、微笑んで口を開いたのだ。

「初めまして。僕が依頼人の、特殊生物工学開発部部长  
氷  
見谷聖斗です」

## 第二章『微笑む鏡像』(1)

### 第二章『微笑む鏡像』

「わあああああ〜っ！」

派手な音を立て、深い草むらの茂みの中に純也は落ちる。木の枝がクツシヨンになったのか、骨折は回避できたが……「ココはどこなのか？」

「ウウウウウウ〜……」

低い、唸り声。前の草むらから、太い脚と爪がぬつと出てくる。

「そつだよね……僕追っかけられてたんだっけ……」

汗を一筋流して、後ずさる。が、すぐ後ろにある木に背をぶつけ、逃げ場を失った。ライオンが大きく口を開け、牙が恐ろしく光る。

「ひどいよお……遼〜」

こんな境遇に自分を追い込んだ男を、少し恨む。『お前を信じる』と言っていたが、つまりは『だから犠牲に喰われてくれ』ということなのか。もしここから生きて帰れたら、『信じる』という単語を辞書で調べさせた上に百回書かせてやる、と心に決める。

ライオンは、一度大きく咆吼。それだけで周囲の空気が振動し、心臓の鼓動を速めさせた。

動物は傷つけない……とかそういう問題の前に、ライオンに

勝てる気がしない。どっかの地獄耳一族と違って。

更に絶望は連鎖する。「シユウウウウ……」というこれまたどこかで聞いた声。右脇の草むらから、あの巨大なへびの顔が現れる！

「うそ……さっきのアナコンダっ?」

確かに先程遼平と戦ったアナコンダだった。二匹相手に逃げることも……戦うこともほとんど希望が持てない。(どっちに食べられた方が痛くないかな……)などと考え始めてしまった頃。

「戻ってこい、マックス!」

アナコンダが喋った。その声に、ライオンが急に大人しくなって巨大へびの方へ歩いていく。少し高い声が、再び。

「おい、お前何者だ?」

自分に向けられた言葉だと気づき、純也はアナコンダを呆然と見つめる。

「きみ……喋れるの……?」

「は? 何を言っている、俺は人間だ、喋れて当然だろう。馬鹿にしているのかお前」

アナコンダの胴体あたり……ライオンが擦り寄っている、小さな

影があった。アナコンダの身体に腰掛けている人物が、一人。

「俺の質問に答える。お前、誰だ？」

アナコンダが頭を下げたので、ようやくその人物が見える。黒髪を後ろで一本に結わえた、目がくつきりとした少年だ。歳は十才前後だろう。この場に全く似つかない、スーツ姿が大人っぽく見せる。

「ぼ、僕は純也。君は……誰？」

「お前っ、この俺相手に敬語を使わないのか！？　なんて無礼なやつめ！」

「いや、だって誰だかわかんないし……」

少年は非常識な人間を見たように、目を丸くする。そしてアナコンダの胴体から降りて、純也の前に来て見上げてくる。

「……お前、高いぞ」

「へ？」

「お前っ、頭が高いつて言ってるんだ！　座れ！」

「は、はい……」

なんとなく雰囲気、純也は正座をする。立っていると純也の方が背が高くなるが、座れば少年の方が当然頭が高い。それに満足したのか、少年は腰に両手を当てて咳払いをする。なんだかその仕草が、子供らしくない。

「俺の名は氷見谷勝太<sup>しよつた</sup>。父様、氷見谷勝人の息子だ！　どうだ、わかったか！」

「なるほど、勝太君だね」

「はあっ！？　違う！　俺の立場がわかったかと言ったんだ！　誰

が『勝太君』だとっ！」

「え？ ……だって、勝太君は勝太君だよ？ 僕は君の立場を訊きたかったんじゃないし」

「な……っ、なんて無礼な人間なんだお前は！ 子供のくせにつ！」  
「勝太君だってまだ子供じゃないか」

純也に当然の如く言われ、驚愕の表情を浮かべる勝太。何か変な事を言ってしまったかと、純也は不思議そうな顔で考える。……もしかして。

「もしかして勝太君さ……、『俺は大富豪の息子だ』とか言いたいのか？」

「あつ、当たり前だ！ 普通それを先に考えるだろう！？ 身分を考えると、身分をつ」

などと言われても、全く実感が湧かない。確かに、現代社会は貧富の差が激しく、身分制度にも近いものもある。けれど。

確かに氷見谷の家は凄いけど。とてつもなくお金持ちだというのはわかるけど。……それはあくまで氷見谷勝人本人であつて、幼い息子が偉いわけではないし。大体、『富豪が偉い』かどうかなんて、純也は決めつけていない。

「ごめんね、僕の周りには普通の人間なんていないからさ、たぶん僕も普通じゃないんだ。だから、許して？」

「ふん……仕方の無いやつだな。しょうがない、子供だから特別に無礼を許してやろう。その……『勝太君』とかいうのも勘弁してやる」

少し照れるように、勝太は顔を逸らす。純也は嬉しそうに「ありがとう」と微笑む。その笑顔に、勝太は呆気に取られた顔をした。

……そんな表情を、純也はどこかで知っている気がする。

「それで純也、お前は何故ココにいる。ここは俺の部屋だぞ」

「僕、実は警備員でさ、依頼人さんの所へ行くためにこの部屋を通つてただけど」

「警備員？ それはあれか、俺達を護るために生きているあの種族か」

「種族って……、僕達も同じ人間なんだけど？」

この少年は、警備員についてどう教えられたのだろう。いや、確かに純也の所の警備員は、種族が違うのではと思わせるような人間ばかりだけれど。

(同じ人間なんだけど……あゝ、でも、アナコンダを素手で倒しちゃうし、僕を平気で犠牲にするし、ちょっと違うのかな……って、コレは約一名だけだね)

苦笑している純也を横目に、勝太は近づいてきたアナコンダの顔に、優しく手を乗せる。それだけでまるで嬉しそうに大蛇は舌を出した。

「すごいなあ……ココの動物達って、勝太君のお友達？」

「べ、別に友達というわけではない！ こいつらは……その……け、家来のようなものだ！ 俺のモノなんだっ」

「家来は、そんなに嬉しそうな顔しないと思うんだけどな？」

「うるさいなっ」

まだ正座したままの純也を、大きな目で睨む。そんな必死な感じがおかしくて、堪えようとするが笑みが零れてしまう。やっぱりこ

の感覚、どこかで知っているような……。

ライオンも、勝太の横に来てリラックスした表情でしゃがむ。どうやら相当飼育慣らされているらしい。

「このライオンが『マックス』で、アナコンダが『キャサリン』だ。この部屋の動物達は、みんな名前がついている」

「あ……そのアナコンダ、メスだったんだ……」

「そうだ。ついさっき、入り口近くで何故か倒れていてな。どうやら他の獣とケンカしたらしい」

「あははは……他の《獣と》、ね……」

ハズレのようで、実は正解だったりして。確かに知的生命体とは戦っていない……とか考えたら、失礼だろうか。

「あ、そうだ！ 勝太君さ、この部屋から出る道わかる？」

「当然だ。ここは俺の部屋だと言っただろう。何処へ行きたいんだ？」

「うん、特殊生物工学開発部って所なんだけど……」

純也がその言葉を口にすると、勝太はまるで汚い言葉を聞いたように眉間にシワを寄せて「特殊生物工学開発部？」と、子供ながら難しい単語を聞き返す。なんだか機嫌を損ねさせてしまったようなので、純也は申し訳なさそうに頷いた。

「お前、あそこの人間に用があるのか」

「う、うん……、どうして怖い顔するの？」

「……あいつには絶対に関わるなど、深く言い聞かされているからだ」

「あいつ？ それって誰？ どうして……」

「……………氷見谷聖斗。悪魔の科学者だ」

## 第二章『微笑む鏡像』（2）

薄暗い地下室で待っていたその人物は、冷気を感じさせない温かな微笑みで警備員達を迎えた。

淡緑色の短髪に、縁の無い丸い眼鏡、整った顔立ち。長い白衣を着ている点を除けば……紫牙澪斗と外見は何の変わりも無い。

「聖斗様、こちらが部長の霧辺真様、そして蒼波遼平様と安藤希紗様でございます」

真達の後ろに下がった執事が、啞然としている警備員達の代わりに名を紹介する。そして、今度は真達に向かい、聖斗を手で丁寧を示す。

「皆様、氷見谷聖斗様は、氷見谷勝人様のご長男にして、この開発部の部長様なのでございます」

その言葉に、聖斗は僅かに照れるように微笑みを深くする。ずっと固まっていた微動だにしなかった澪斗が、跪いて右膝をつき、左膝を立てて頭を下げた。

「……ご無沙汰しておりました、兄上」

「無事のようで何よりだよ、澪斗」

その声の質は、限りなく近かった。背格好、声、珍しい髪の色までほとんど同じ。

聖斗は笑顔で澪斗へ腕を伸ばして立たせ、真の所まで歩いてくる。そして、頭を下げてこう言った。

「霧辺さん、初めまして。双子とはいえ、弟がお世話になり、ありがとうございます。実は今回僕は」

「……氷見谷聖斗はん、ワイらに一分時間をくれませんか」

「はい？ どうぞ、構いませんが……」

「お言葉に甘えまして……せーのっ」

小刻みに震えて俯いていた真が、いきなり顔を上げる。後ろの遼平と希紗も同じようにして。

「……あつ、兄上ええー!?」「」

「何やこの展開はアアー!?!」

「ドッキリっ? ドッキリ企画なのコレは!?! カメラはどこっ!?!」

「やべええっ、夢が覚めねえ! 現実に戻れねえー!?!」

それぞれ絶叫したり、部屋をきよろきよろと見渡したり、頭を押さえたりと、警備員達は実に個性豊かなりアクションをとる。澪斗は恥をかいたように振り返った。

「ええいつ、うるさいぞ貴様ら! 喚くな!」

「だつて!」

「澪斗がっ!」

「敬語をっ!?!」

「何だその言いようは! まるで俺が礼儀をわきまえぬ人間のようなではないかっ!」

「「「その通りだ!」」」と三人全員で澪斗を指差す。その勢いに押され、一步後ずさる澪斗。(彼の)予想外の強意肯定。

「じゃあナニかアっ、澪斗が氷見谷家の御曹司ー!?!」

「双子っ? しかも弟!? 弟としてどうなのその性格はー!?!」

「てめえっ、その髪は地毛だったのかよ!?!」

「……蒼波だけ驚く観点がズレていると思うのだが……」

もう怒る気にもなれないのか、肩を落として澪斗は眼鏡を指で直

す。驚かれることは、事前にわかっていたらしい。

「……えっと、そろそろ一分経つんですが……」

叫びすぎて息を切らす警備員達へ、ずっと微笑みで黙っていた聖斗が口を開く。彼自身は驚いた様子も、動じた感じも全く見せない。

「賑やかで若々しくていいね、澪斗」

「兄上、包容力がありすぎです……」

「裏社会ってこんな感じなのかい？」

「大きく誤解です。この者達は、例外の頂点にいるような人間なのです」

疲労が溜まったような表情をしつつ、澪斗は必死に首を横へ振る。裏社会への間違った先入観を持たせてはいけない。

「どついうことだよ、説明しろ紫牙……じゃなかった、氷見谷」

「……紫牙でいい。……俺はもう氷見谷ではない」

深呼吸して、遼平はやっとそれだけ口にするが、澪斗に否定される。真や希紗も困惑の顔をしていた。

「そうですね……。澪斗、まずは少し僕達のコトを紹介しないと」

「……わかりました、俺が言います。……改めて言おう、俺は氷見谷の次男だった」

「『だった』……？」

「五年前までは、な。五年前、俺は氷見谷の名を捨て、この家を出た。それから裏社会に入り……紆余曲折があつて警備員の今に至る。

兄上は氷見谷に残り、この開発部で研究を続けていた。ちなみに紫牙という名は、俺の母方の姓だ」

「ちょ、ちょっと待てや。じゃあさっきの氷見谷蘭つちゅー奥方は、あんたの母親なんか？」

「……違う。俺達の実の母は、出産直後に死んだ。あれは後妻だ」  
「皆さん、お母様にお会いしたんですね。何か仰っていましたか？」

そう聖斗に問われ、真達は躊躇う。苦笑を漏らした聖斗は、答えなど問う前に知っているように思えた。

「……………奥様は、『下賤な者を氷見谷に入れるな』、と仰せでした」

聖斗に気を遣いながらも、執事は命令を忠実に遂行する。「そうですねか……………」と聖斗は今知ったような仕草で苦笑を深くした。

「皆さんに居心地の悪い想いをさせてしまったようで……………すみません。僕の責任ですので、どうか気にしないでください」  
「い、いや、全然大丈夫ですから……………」

深々と頭を下げる聖斗に、真は焦って手を振る。澪斗の双子ということは真より年下ということだが、何故かぎこちない敬語になっ  
てしまう。聖斗は、顔を上げるとにっこり微笑んで話を続けようとした。

「ありがとうございます……………それですね、僕が今回依頼した件のことなのですが」

「……………聖斗はん、あの、度々話を切るようで申し訳ないんですが、  
「なんでしょっ?」

「頼むのでその顔で笑わんでくださいっ」

「はい？」

首を傾げる聖斗の両肩を手でしっかり掴み、真は本気の顔で目を合わせて切願する。既に支部長の後ろで、二人の部下はしゃがんで激しく脱力していた。

「澪斗がつ、澪斗の顔が笑ってるわ！ しかも邪気ゼロでっ！」

「惑わされるな希紗っ、アレは紫牙じゃねえ！ 紫牙じゃねえんだ……でもわかってるのに悪寒が止まらねえ！！」

「聖斗はん！ もっと怒って！ 睨んで！ 殺気を放ってくださいっ！」

「……ねえ澪斗、君はいつも一体どんな風に過ごしているんだい？」  
「いや、俺は普通に生きているだけで……」

普通に生きている人間は殺気を放つたりしないと思うのだが、弟は真面目に答える。何がおかしいのか、双子の兄はずっと小さく笑っていた。

## 第二章『微笑む鏡像』(3)

「では少し真面目な顔で……」と、聖斗はなんとか目に力を込めて、視線をやや鋭くする。こうして見ると、本当に合わせ鏡を見ているように二人は瓜二つで。

「僕はこの度、長年研究していた植物の成長を助ける改良型新種微生物の開発に成功しました。これがそのデータが入ったディスクです。これは大変画期的な発明でして……ヒミヤ産業の大きな進展となるでしょう」

「微生物の開発データ？ そんなの欲しがるヤツがいるのかよ？」

「もちろん、ただ新種の微生物というわけではありません。この微生物は、土壌に放つことで、たとえ砂漠でも植物が生える環境にできるのですよ」

「な……！ 本当でっか!？」

「なんだよ、そのドコがすごいんだ？」

CDサイズのディスクを、聖斗はデスクの上に戻す。そして中央のデスク上にあるキーボードを素早く叩くと、奥の一番大きいディスプレイに世界地図が映った。更にマウスで一部分を拡大させ、西アジアやアラビア半島をアップにさせる。

「僕から説明しましょう。過去、この国々には砂漠地帯から湧き出る『石油』という天然資源が豊富でした。それを海外に売ることによってこの地域には石油王と呼ばれる大富豪が増えたのです。しかし、限りある天然資源は、皆さんもご存じの通り約三十年前に完全に枯渇しました。よって、今この国々には資源が全く無い。……ここまではいいでしょうか？」

「あー……石油……天然資源？　なあ、コカツってなんだ??」

「兄上、あの者は脳が足りないので、気にしなくて結構です」

「ンだどつ、わかるんなら教えるよ！　変な日本語使いやがって！」

「貴様の脳の方がよほど変なんだ！　辞書を持ち歩いて生活しろ！」

「もつと簡単な事を喋れ」だの「貴様は言葉を知らなすぎだ」だの、すぐ怒鳴り合いのケンカが始まる。ディスプレイの横に立ったまま苦笑する聖斗に代わり、責任を感じて真がハリセンの一閃で見事に二人を抑えた。

「エエ加減にせえ！　遼平も漣斗も、もつとカルシウムを摂取せんか！　あんたら気が短すぎやで！」

「あのね遼平、つまりは、もうあの国々には膨大な金持ちと砂漠しか残ってないってコトなのよ」

要約しすぎな感じもあるが、希紗が実に簡潔にまとめる。当然の常識……というか、義務教育課程で習うことなのだ。

「えっと、話を続けますね。……今この国々の富豪達が求めているのは何か。それは新たな資源です。でも、灼熱の砂漠には植物の芽も出ない。そこに目をつけた僕は、砂漠に木々を生やせる手段の開発を始めたわけです。木材は、今や過去の石油に劣らぬ需要量ですからね」

「金持ちのためのビジネスってわけかよ」

「まあ、端的に言つとその通りですね。そして五年かけてそれに成功……一歩手前まで来たんです」

「一歩手前？」

「はい。あと少しデータに修正を加えれば、この開発は完璧に成功に至ります。ただ修正プログラムを入力しなければ、データは使い物になりませんが」

「どうして早く修正しないんですか？」

「それは……」

ディスプレイの画像を消し、聖斗が一番真剣な顔つきになる。真達の前に人差し指を立ててみせて。

「こうでもして遅らせないと、警備員の弟に会えないじゃないですかーっ」

「……はあああっ？」「」

満面の笑みの兄の前で、ガクツと崩れ落ちる三人。澪斗は恥ずかしいのか、俯いてずっと眼鏡を押さえていた。

「延ばせるだけ延期して、その間を警備員である弟に護ってもらおうと思ひまして。だって、そうじゃなきゃ家出した弟と再会できないんですもん」

「まさか……それでわざわざワイらのところに……？」

「はいっ！ あ、そうそう、身内関係者ってことで、報酬はまけてくださいいね？」

「……」「」

冷酷な弟とは北極から赤道までぐらい性格の違う兄に、言葉を失う。双子は気性が似るといふのは、どうやら嘘のようだ。……それ

に、意外とセコい。

要するに、警備という名目で弟に会いたかっただけらしい。つまりこの人物は。

「とつても会いたかったよ、澪斗」

「……こりゃ、親バカならぬ兄バカやな……」

「なっ、真！ 兄上を馬鹿呼ばわりするな！ 兄上は……昔からこうなんだっ」

「……弟もバカよ、これ」

「紫牙が一人で来たがった理由はこれかよ……」

確かにこれは他人には知られたくないかもしれない。長年明かさ  
れなかった澪斗の事実が今、明らかに。

「……ま、まあこういう事だ。わかったら貴様らは帰れ」

「うーん、言う通り、折角の兄弟の再会に水をさすのも悪いかア」  
「でも、実際問題スパイとか来るんじゃないの？ 澪斗一人で大丈  
夫？」

「今聞いた限りじゃ、冗談半分で警備できる代物じゃねーだろ」

本当にこの研究が成功し、実現されれば、兆単位の金が軽く動く。  
そんな氷見谷の命運がかかったディスクを、この若い男は持っているのだ。

「澪斗、いいんじゃないかな、霧辺さん達にもお願いしても」  
「ですが兄上っ」

「よし、決まりだな。依頼人に逆らうなよ、紫牙」

大富豪から報酬が入る、と喜ぶ遼平を、澪斗は悔しそくに睨む。  
なんだか交渉が成立したようなので、「じゃあ……」と真が仕事内容について話し合おうとした時。

ロックがかけられていなかった背後の自動ドアが、素早く開く。  
誰が入ってきたのかと警備員達が振り返ると、影が一瞬で突っ込んできた。

「地獄の底から復讐キークー!!」

遼平の顔にピンポイントで、靴の裏が迫って直撃した。「んがぁっ!?」と情けない声をあげて、紺髪の中から床に倒れ込む。仰向けに倒れた遼平の顔にまだ右足を乗せながら、腕を組んで怒っている小柄な人物が一人。

「遼! 今度ばかりは本当に怒るよ!? 死にかけたじゃないかつ」  
「もう充分怒ってんじゃないか! しょうがねえだろっ、適材適所だったんだから!」

「ライオンに食べられる適材って何さ!? あの後キャサリンまで出てきて、僕すごく驚いたんだよっ!」

「誰だよキャサリンって!? いい加減お前足をどけろっ」

あかく遼平の顔をもう一度強く踏んでから、純也は男の倒れた身体から降りる。部長が涙目で少年の両手を握った。

「よかったア、純也生きてたんやなっ。枕元に立たれた日にはどうしようかと……」

「っていつか、さっきの技名はなに？　なんか純くん、ネーミングセンスが段々遼平に近くなってきてない？」

死んだと思われるのも嫌だが、全く心配されていないというのも複雑な気分になる。とりあえず勝太の言った通りの道に来て会えたわけだが……なんだか無性に疲れた。ため息を一つ吐き、純也は薄暗く寒い部屋を見渡して。

「あれ……？　れ、れ……れれ、漣君が二人ー！？」

「あー、どっから話せばエエかなア……」

何度も目をこすって幻覚じゃないことを確認する純也に、真は頭を掻いて、微笑む漣斗の鏡像を見た。

## 第二章『微笑む鏡像』（4）

「いや、まさか溇君に双子のお兄さんがいたとはね」

既に五個目のフランスパンをかじりながら、純也がしみじみと言う。純也とその隣りの遼平の驚異の食物吸収速度を楽しそうに聖斗が見ていた、そんな時だった。

「まあ溇斗のことなので、僕や氷見谷の事は外に言ったりしないと  
思っていましたよ。溇斗ってば生真面目ですからね」

「兄上……っ」

「流石お兄さん、わかってる」

溇斗の右に座った希紗が、恥ずかしそうな溇斗を見て感嘆の声をあげる。真も溇斗を一瞥して、至極珍しい彼の表情を窺った。こんな感情的な顔も出来るのか、と。

他の異常なまでに巨大だった部屋に比べれば比較的小さな部屋で、聖斗を含めた六人は晚餐をとっていた。「ディスクは僕が肌身離さず持っているの」と聖斗が言うので、特に警備体制をとることなく普通に食事をしている。そもそも、最後の仕上げである修正プログラムも、彼にしか出来ないものらしい。

長机の短い側に聖斗、その向かいに真が座り、左右の長い側面に純也達が座っている。次々と運ばれてくる豪華なフランス料理を、純也と遼平が物凄い勢いで平らげていく。みつともなくて真はそちらから顔を背け、話題を振ることにした。

「でもようわかりましたね、溇斗が中野区支部にいますことが。音信

不通だったんでしょ?」

「はい、確か最後に連絡があったのが、四年前でしたから。電子メールでたった一言、『警備会社ロスキーパーという所の、中野区支部にいる』っていう内容でした」

「素っ気無いわね。お兄さんが心配してたんだから、連絡ぐらいすれば良かったじゃない」

「……フン、俺は家出の身だ。そうそう連絡などできるか」

慣れた手つきでフォークとナイフを扱いながら、澪斗は当然のように言う。聖斗が僅かに寂しそうな笑顔で、微笑んだ。

「それなんだけどよ、なんでてめえは家出なんかしたんだよ。反抗期の女子高生かコノヤロー」

食べながらもケンカ腰なのだからある意味スゴイと、真は感動さえする。上手くフォークが使えない遼平は、ナイフを両手に持って、肉を突き刺しながら口に運んでいた。

「遼、人には色々理由があって……」

「でも実家がこんな大富豪だぜ? 気にならねえか?」

「それは……」

それはそうだけど、と言いかけて、純也は止める。澪斗が軽はずみな理由で動くはずがない。でもそれならより、気になってしまう。そこまでの理由とは?

「……自由になりたかった。……それだけだ」

「自由、ねえ……」

確かに上流社会は、家の束縛が強いと聞く。生まれた時から結婚相手が決まっついていて、仕事も己に選択肢が無かったり。自由など知らずに豪邸で長寿をまっとうしていくのは、どんなに贅沢で息苦しい人生なのだろう。……遼平達には、見当もつかない。

「俺は金にも権力にも興味は無い。後悔はしていない」

「へっ、御曹司が考えることはわからねー」

吐き捨てるように、遼平は言う。子供の頃から自由奔放に生きてきた遼平には、結局わからないのかもしれない。

「せやけど、そんな事が出来るんも、あんたが次男だったからやろ？ 聖斗はんは次期ヒミヤ産業の社長なんでつしゃろ？」

「いいえ、僕は後継ぎではありませんよ。僕は研究は得意ですが、会社運営とかは全く出来ないの」

「へ？ じゃあ後を継ぐのは？」

そこまで話を聞いていて、純也はとある人物を思い出した。遷斗達の話ですっかり忘れていたが、そういえば……。

「もしかして、氷見谷勝太君？」

「あれ、よくご存じですね。そう、蘭お母様の実子、勝太君が後継ぎになる予定です。あくまで暗黙的に、ですけど」

「おい純也、勝太って誰だ？」

「あのサファリパークで、僕を助けてくれた子だよ。道を教えてもらったんだ。僕より小さい男の子だったけど」

そういえばあの部屋は主人勝人の子息の部屋だと、執事豊臣が言っていた。その子息というのが『勝太』なる人物で、どうやら聖斗達の腹違いの弟にあたるらしい。長男が研究に没頭し、次男が失踪した今、その三男である子供が後継ぎになるのか。

『いいか純也、氷見谷聖斗には警戒しろ』

勝太を思い出して、同時に『あの事』も純也の脳裏を過ぎる。部屋の出口まで送ってもらう途中で、勝太に受けた注意を。

『どうして？ 怖い人なの？』

『あいつは悪魔だと聞く。その、あれだ……、ヒトデナシ、とか言うやつだ』

『人でなし？ ウチの遼よりもかな？』

『たぶんな。誰よりもヒドイ性格らしい』

会話の断片だけを記憶から引き出し、もう一度聖斗を見やる。にこやかに笑う、いい人……だと思う。(悪魔……人でなし？ ドコが……??)と、フォークを止めて首を捻る。純也が知っている人達の中でも、聖斗はかなりの好印象なのだ。……といっても、純也の場合、嫌いな人間などほとんどいないが。

『どうしました、純也君？』

『あ、いや、なんでもないんです聖斗さん』

「……………ん……………」  
「聖斗、さん？」

考え込むように顎に手を当て、聖斗は眉間にシワを寄せる。もしかして考えていた事がバレてしまったのかと、純也は恐る恐る表情を窺った。

「澪斗が羨ましいな……………」  
「……………へ？」

「純也君、僕も澪斗みたいに呼んでもらえませんか？」

「はい??？」

いきなり何を言いだしたのかと、純也は混乱する。真達も驚くし、澪斗など飲んでいた紅茶を噴き出しかける。

「呼ぶって……………どうやってですか？」  
「いや、僕も君付けで呼ばれてみたいなー、なんて思いました」  
「はあ……………じゃ、じゃあ、『聖君』？」  
「うわあ、いいですねソレ！ 若返ったみたいだあ」  
「兄上……………二十二にもなっ……………」

手を叩いて喜ぶ聖斗に、澪斗は何度目かのため息を吐く。  
どちらも、まだ二十二歳とは思えない貫禄。聖斗など、普通に真より年上に思えた。見た目は澪斗そっくりなのに。

「皆さんも、僕のことは澪斗と同じように扱ってください。『ダメ

口』ってやつで」

「あの、それはたぶん『タメ口』の間違いだと思いますけど……」

「あれ？ そうなんですかー」と、恥ずかしそうに言ってから、はっと我に返ったように首を振る。

「って、駄目ですよ安藤さん、敬語を使っちゃ」

「あ、そっか……。ねえ真、クライアントの指示だし、いいわよね？」

「うーん……。ワイとしては何とも言い難いなア。相手は大富豪の子息やし……」

「なんだよ、あっちがいいって言ってんだから、別にいいじゃねーか。な、聖斗？」

「はい、もちろんです」

「……遼平、あんたは一度も敬語を使ってへんがな……」

遼平の言葉に笑顔で答える兄を見て、弟は複雑そうな顔をする。その意を読みとり、真は澪斗に尋ねた。

「なんてことになっとなるけど、あんたはエエか、澪斗？」

「……兄上がそれを望まれるのなら……」

いつもの無関心そうな表情ではなく、困って独白するように彼は呟く。そんならしくない澪斗に、少し驚いた。兄の前では、自分に素直になるらしい。

「じゃあ決定ね！ よろしく聖斗っ、私のことは名前で呼んで」

「はい」

今までで一番嬉しそうな聖斗。真はふと、そんな兄を哀しい眼で見る澪斗に気付いたが、何も言わなかった。

## 第二章『微笑む鏡像』（5）

律儀なノックの音を聞いて、聖斗は振り返り、「どうぞ」と入室を促す。やっぱり本に書いてあるような律儀さで礼をして、聖斗の私室へ足を踏み入れたのは澪斗。

小さなベランダへ続く巨大な窓と、壁を埋め尽くす本棚、無駄に大きいベッドに、質素な円卓……全てが、この家を出た五年前のあの日と同じで。視線の先にいる白衣の男も変わらなくて……変わったのは、血が染みついた警備員の制服を着る自分で。

「一通りの警備配置が決まりましたので、ご報告致します。真と希紗は氷見谷家の警備員と交渉中、純也は開発部近辺を警備、蒼波には屋根の上で厳戒態勢をとらせています」

「屋根の上？ また面白い警備だなあ。……それで、僕の話は澪斗が護ってくれるのかな？」

「はい、俺が警護をさせていただきます」

「そう……。じゃあ警備員さん、こっちに来てよ」

微笑む聖斗に指で示され、白い円卓の椅子に腰掛ける。聖斗も向かい合って座り、前もって用意されていた二つのワイングラスに、兄は赤く輝くワインを注ぐ。

聖斗はグラスを持ち上げ、赤い液体の先に弟を映して嬉しそうに。

「改めて……お帰り、澪斗」

「……はい」

緊張の糸が切れたように、澪斗は身体から力を抜いてグラスを持つ。キン……とグラス同士がぶつかる、乾杯の音を立てる。

「こうして一緒にグラスを傾けるのは、僕達初めてだよね」

「そうですね」

「澪斗ってば真面目で頑固なものだから、『未成年の飲酒は違法です』とか言っただけ全然飲んでくれなかったからなあ」

「兄上も未成年だったではないですか」

「裏に行っても、頭は固いままかあ」

小さく「申し訳ありません」と呟く。赤ワインを口に少しずつ含みながら、聖斗はおかしそうに静かに笑う。

「澪斗も目が悪くなったのかい？ 眼鏡似合ってるよ」

「いえ……、これには度は入ってません。あくまで仕事用です」

「……頑張ってるんだね、警備員として」

グラスをゆっくり揺らしながら、聖斗は目を細めて一言一言区切りながら口にする。その言葉に、澪斗は俯き気味だった顔を上げて兄と目を合わせる。

「俺は、目的の手段としてこの仕事を利用しているだけです。目的の……為に」

その静かで強い言葉に含まれる、否定するような冷たさ。「そう、なんだよね」と、悲しいため息混じりに聖斗はワイングラスを卓上

に置く。漣斗は、真剣な顔で深く頭を下げた。

「本日は兄上に道化をさせてしまい、誠に申し訳ありませんでした  
……………」

「……………頭を上げてよ、漣斗。僕に出来る事をしたまでなんだから  
しかし……………俺のせいで余計な手間を……………」

唇を噛んで、漣斗は頭を上げない。聖斗のため息を聞いて、肩を  
びくつかせる。

「漣斗の眼を一度見て、なんとなく察したよ。これでも僕は、君の  
片割れだからね」

「……………すみません」

「謝らないで。一番辛いのは、漣斗じゃないかい？」

数年間したことの無かった、胸に何かが突き刺さったような漣斗  
の表情。苦しそうに、葛藤にさいなまれるように、その顔は窮して  
いて。……………しかし顔を俯かせて、兄にはそんな表情は見せない。

「俺は……………俺はこの目的の為に生きてきたんです。これが果たせる  
のなら、俺は……………！」

「……………わかってるよ、充分わかってる。それは、僕達二人の目  
的でもあるのだから」

聖斗は席を立ち、俯く澪斗の肩に軽く手を一度置いて、大きい窓の所まで歩いていく。そこから、早く更けてしまった冬空を眺めた。

「兄上から依頼が来た日の朝……俺はあの時の夢を見ました」

「澪斗もかい？ 僕もだよ……随分と久しぶりだった。また……あの方を……」

「全てを終わらせます。俺の手で……全てを」

立ち上がった澪斗は、握り締めた両手を見つめて決意を繰り返すようにそう断言した。

### 第三章『閉ざされた思い出』(1)

#### 第三章『閉ざされた思い出』

翌日は、何事も無く時が過ぎた。本邸内はいつも落ち着きすぎる静寂が漂い、緊迫感など微塵も感じさせない。ただただ、ゆっくりと穏やかに一日が終わっていく。

強いて言うならば、氷見谷勝人社長から電子メールで『早く研究成果を提出するように』との連絡が来た程度で、聖斗は「いつものことですから」と、笑顔でそのメールを削除していた。

「豊臣さん、ありがとうございますー」

「いえ。安藤様、澪斗様、いつてらっしゃいませ」

三日目の朝。氷見谷家の白い正門の前で、リムジンから降りた希紗は運転席の豊臣に礼を述べる。隣りの澪斗も、無言で頭を下げた。

「今日中には帰ってくるんで、聖斗によろしくお願いしまーす」

「はい、お気をつけて」

二人を正門まで送ってくれたリムジンは、豊臣の運転で門内に帰っていく。僅かに戸惑ったような澪斗が、いつもの眼鏡を指で直す。青い制服を着た二人が、寒風に吹かれていた。

しばらく奇妙に笑いを堪えるような希紗と、ずっと俯いて黙っている澪斗が立ち尽くす。だが、やがて門に背を向けて歩き出す希紗

が。

「さあ、行きましょ澪斗」

執事豊臣に手渡された、一冊の小冊子ほどの本邸内部図を確認しながら、純也は屋敷の中を歩き回る。こんなパンフレットまであるとは、本当にここはテーマパークか何かか。

「えーっと、一階が『氷見谷一家趣味の部屋』で、二階が『私室』……っ」と

他にも細かな部屋割りがあるが、大まかにはこんな感じだ。ちなみに地下は、聖斗の特殊生物学開発部しかないようだ。食事に使われる部屋、浴場、更には医務室まで……本邸で暮らせるだけの設備が整っているが、氷見谷の家族には一人一人屋敷があるのだと豊臣が言っていたので、使うのは従業員なのだろうか。

「でも……？」

純也達警備員も、その部屋を使わせてもらっている。……聖斗と一緒に。

聖斗の屋敷は何処だ？ 二階にある私室の場所は知っているが、聖斗は本邸から出ていない。ずっと本邸内で生活しているのだ。忙しいから帰らない……のか？

他にも、疑問に思っ点はまだある。

いくら家出したからといって、奥方の澪斗に対するあの態度は？

優秀な科学者である聖斗にまで、嫌悪感を露わにするその理由は？  
勝太の言っていた『悪魔の科学者』という意味は？

そして、事務所での、あの時の澪斗の瞳。アレは、『兄を知られ  
たくない』なんていう軽い感情からだったか？

……あの双子、何か引つかかる……。

歩きながら思考を巡らせていて、純也はふと考えを止める。自分  
が今、大きな十字路の中央にいることに気付いたからだ。前後左右  
どこまでも赤い絨毯が続く、廊下の真ん中に。

「あれ？ れ？ れ？」「コ……どこ？」

焦って手元のパンフレットを確認するが、十字路なんてたくさん  
ある。階段は昇っていないから一階だと思うが、それはそれで、よ  
り一層怖い。一階は、『氷見谷一家趣味の部屋』エリアなのだ。下  
手に扉を開けたら最後、異世界へ飛ばされる羽目になる。

とりあえず、今来た道に戻ってみる。これが安全でより確実だろ  
う。百八十度後ろへ振り返って歩き出そうとした時、こちらへ走っ  
てくる人影に気付いた。

「あ、勝太くーん！ ちょうど良かった、また道を……」

「お前つ、一緒に来い！」

「へっ？」

何故か必死に走ってきた勝太に、腕の裾を掴まれて十字路の左へ

連れていかれる。その勢いのまま、騎士鎧が並ぶ回廊を走らされ、しばらく行つたところで騎士鎧同士の隙間に素早く入り込む二人。

「あの、勝太君？」

「しっ、黙れっ」

無理矢理口を塞がれ、何事かと勝太の視線の先を窺う。やがて、慌ただしく三人のメイドがスカートを引き上げて走ってきた。

「勝太様ーっ、勝太様ー！」

「何処においでですかー！？」

小さく隠れた純也と勝太に気付くことなく、メイド達は廊下の先に走り去っていく。その足音が屋敷内のBGMに掻き消された頃、勝太が「ふう……」とため息とも安堵ともとれる音を立てた。

「なんだか今の人達、勝太君を捜してなかった？」

「見ればわかるだろう、俺は逃げていたんだ。今日は逃げ切れたな……」

「どうして僕まで巻き添え？」

「……お前、俺を見た後であいつらに会ったら、俺の逃げた先を教えるだろう？」

「うん。なんか困ってたみたいだし」

「だからだ」

幼いながら、なかなか勝太は鋭い。警戒心が強いと言うべきか。その辺りは、母親似らしい。

「何か悪いことをしちゃったの？」

「俺は悪いことなどしない！ あいつらが悪いんだ。俺はバイオリ

ンなどやりたくないと言うのに、あいつらは俺の言葉など聞かん  
「それでバイオリンの授業から逃げてきたんだね」

なんだかんだ言っただけの子供とそんなに変わらないな、と純也は  
苦笑する。ただ束縛が厳しいのだろう。

「これからどうするの？ あのサファリパークに逃げる？」

「いや、おそらくあの部屋にはもうメイドが行っているだろう。…

…こうなったら、俺の秘密基地に行く」

「僕も行つていい？ 秘密基地とか気になる」

「ふ、ふんっ、仕方ない、お前だけだぞ。ついてこい」

嬉しさを隠すような顔で、勝太は立ち上がる。純也はそんな彼の  
後についていくことになった。

### 第三章『閉ざされた思い出』(2)

楽しそうな笑顔の純也を連れて、所々の曲がり角で注意しながら勝太は一階の行き止まりまで来た。行き止まりの廊下の壁に、南京錠が鎖と一緒にかけられた古びたドアが一つ。

屋敷中にある両扉とデザインは同じだが、掃除がされていないのかその扉だけ埃被っていて薄汚い。氷見谷の中にもこんな部屋があるのかと、純也は驚いて扉に指を触れてみる。埃で指先が汚れた。

「そこからは入れない。こっちだ」

勝太は言って、汚れた扉から手前、右壁にある普通のドアへ入っていく。中は狭く、誰もいない。よく見るとモップやバケツがあることから、清掃用具置き場だと思われる。

オーダーメイドであろうスーツを汚しながら、勝太は清掃用具置き場部屋奥の高い窓まで、バケツを積み上げて手をかける。どうやらあの窓から外へ出るらしい、と察した純也は、勝太を押し上げて手伝う。屋敷の外へ着地できた勝太の声で、「早く出てこい」と聞こえて、純也は身体を捻って小さな窓から抜け出た。

警備服の長袖をさすってしまっ、容赦ない北風。勝太は外の氷見谷家警備員に警戒しつつ、整備された庭を走って横切り、あの古びた扉の部屋の窓であろうガラスを、両手で押し上げる。……と、鍵がかかってないのか、簡単に窓は開いてしまった。

「勝太君、入ってもいいの？ この部屋、たくさん鍵がかかってたよ？」

「いいから来い。俺が許す」

勝太の権限がどれほどなのかは知らないが、あの鍵の量は許す・許さないのレベルではないような……。

躊躇っている純也に構わず、勝太は開いた窓から身を乗り出して入っていつてしまふ。ここで外の警備員に見つかるはずなので、純也も片腕で窓の縁を掴んでさっと転がり込んだ。

室内は電気が通っていないのか、薄暗かった。今入ってきた窓からの光だけが光源で、目が闇に慣れるのに時間がかかる。やがて、荒れた部屋が見えてくる。

「ココは……」

「今は俺の秘密基地だ。ココには、誰も入ってこない」

そう言われて、純也はポケットにしまっていた氷見谷家本邸のパンフレットを確認する。先程外に出た時に確認した太陽の位置関係から、ココはおそらく東端の部屋。この部屋の名前は……。

「あれ？」

空白。

ココだけ、部屋の部分に何も書いていない。何の部屋なんだ……？

そんなに広くない部屋……足下に、僅かに土が散乱している。室内中央に、円形にレンガで囲まれた花壇らしきものがある。

「この部屋は使いの者達に何故か『開かずの間』と言われていてな、誰も入ろうとしない。理由を訊いても、誰も答えない」

「だから秘密基地にしたんだね。でも、元は誰かの部屋だったみたい……」

中央の花壇の所まで歩いて行って、純也は土をよく見る。もうポロポロだが、植物が生えていた痕跡が微かにあった。天井にも園芸用らしきライトがあるし、ココは昔、花が広がっていたのではないだろうか。

「今は俺の部屋だ。母様も、まさか俺がこの部屋にいるとは思わないだろう」

「蘭様もココには近づかないの？」

「俺にこの部屋に近づかないよう言ったのは、母様だ。……言っておくが、絶対に秘密だぞ！」

「わかってるよ。約束するね」

そう言っつて小指を差し出す純也に、勝太は首を傾げてその指を見た。「なんだそれは」と、訝しげに小指の形を真似する。

「あ、コレね、約束のしるし。こうやって小指と小指を絡ませると、『約束する』って意味なんだ。指切りって言うんだよ」

「ほお……じゃなかった、くだらんっ」

一度感心しかけて、勝太は首を激しく振る。なんだか無理に自分を抑えているようで、その感情をやはりどこかで知っている。ここまで激しくなかったが、確かに……。

「変なコトを教えるなっ、この《愚か者》が！」

「あつ……あゝ！ 澪君だ！」

ビシツと勝太を指差し、強く自分の言葉に納得する。やっとわかった。初めて会った気がしなかった理由。この人物、性格が澪斗に似ているのだ。

「な、なんだお前いきなり……。俺のことを指でさすな！」

(ミニ澪君だよ……これ……)

本当に澪斗と勝太は義理の兄弟なのか？ 聖斗とより、勝太と本当に血が繋がってないか？ 命令口調といい、自己主張主義といい、そっくりではないか。きつと大きくなったら、人のことを見下した目で「貴様」とか呼びだすに違いない。

やはり大富豪の息子という環境が、こうさせるのか？ 聖斗は例外なのだろうか……。

「ご、ごめんね……。ところで勝太君、紫牙澪斗って人知ってるよね？」

「シガレイト……？ 知らん、誰だ？」  
「え……」

腹違いとはいえ、兄を知らない？ ……そういえば澪斗が家出をしたのは五年前だ、勝太にはまだ物心がついていなかったかもしれない。もし誰からも澪斗の存在を教えられなかったら、ずっと知らずに……？

「聖君……聖斗お兄さんの双子の弟だよ。勝太君のお兄さんにあたる人なんだけど」

そこまで言って、勝太がすごく嫌そうな顔をしているのに気付いた。子供らしく、嫌悪感を露わにしてくる。

「お前、聖斗に会ったんだな」

「う、うん、依頼人さんだから」

「純也、言ったはずだ。あいつは悪魔なのだと。あいつの言う事なんて全部悪いことだ。そんなの、嘘に決まってる」

「そんな、聖君はいい人だよ。澁君だって本当にそっくりだし……。どうしてそんな事言うの？ 勝太君のお兄さんじゃないか」

「うるさい！ あんな人間の弟だなんて、俺は嫌なんだ！」

純也を睨み上げて、勝太は叫ぶ。埃舞う薄暗い部屋で、その声はよく響いた。純也は自分より小さい子供に、怯んでしまう。

「悪魔が父様の子供だなんて……嫌なんだ……！ 俺と血が繋がっているなんて……っ」

「どうして……一体何があったの？ 理由を教えてよ」

そこまで勝太が憤る理由とは？ まるで聖斗の存在そのものが禁忌のようだ。勝太は純也に背を向けて、しばらく押し黙る。あたかも、当然の常識を説明するのに困っている人のように。

「俺は昔から、母様に『アレは悪魔なのだ』と教えられてきたんだ。氷見谷聖斗が悪魔である理由は……あいつが、氷見谷の乗っ取りを企てているからだ」

「な……乗っ取りって……っ？」

「まだ父様は知らない。でも、母様はそれをずっと知っていて、あいつの野望を阻止するために俺に後を継げと言うんだ。俺は、氷見谷を悪魔から護る！」

少年から告げられる、衝撃の一言。隠されていた聖斗の企みと、奥方蘭の意志。だがそれは真実なのか？ 本当に、聖斗は……。

「あつ、コレも他人には言うなよ！ 特に聖斗には絶対だ！ わかつたなっ！」

「わ、わかった……！」

聖斗は今回の研究で氷見谷の支配権を……？ 澪斗はそれを知っているのか？ いや、もしかしたら澪斗はそれを事前に知っていた……。

(そんな、まさか……。でも、もしそうだとしたら……僕達は……)

利用されている？ それともコレには深い意味が？ ……このままでいいのか？ 真実は……！

気まずい沈黙になってしまい、純也は部屋の隅へ歩いていく。埃の積もった低い棚の上に、元は白かったであろうフォトスタンドがあった。やっぱり埃まみれでガラスの中の写真がよく見えない……。

指で砂埃を払うと、一部分だけ写真が見えてきた。緑色の長髪の女性が、こちらに向かってにこやかに微笑んで椅子に座っている写真だ。その腹部は大きく膨らんでいる……妊婦なのだろうか？

「あ……っ」

写真の全貌が見たくて強くこすっていたら、フォトスタンドを落としてしまった。カシャンツと音を立ててガラスが碎けてしまう。

「何をしているんだ」と勝太に睨まれ、純也はフォトスタンドを隠すように焦って前に立ち、「なんでもない」と首を振った。

知ってはいけない間に、少年は触れつつある。

### 第三章『閉ざされた思い出』(3)

空調設備があまりきいていない寒い地下室で、遼平は自動ドアの横に椅子を置いてそこにずっと座っていた。退屈すぎて何度も脚を組み直し、だらしなく背もたれに寄りかかる。

「ヒマでしようがねえ」

声を出してみるが、だからといって状況が改善されるわけでもなく。部屋の中央奥、たくさんコンピュターディスプレイの前で、白衣を着た男がずっとキーボードに打ち込む音だけが残る。

聖斗の特殊生物工学開発部は、暗いせいもあるのかそんなに広く見えない。

(まあ、広くする必要がねえんだろうな……)

珍しく遼平が察する。昨日知って呆れたのだが、この開発部、実は聖斗以外に部員がいない。一人だけだから、これくらいのスペースがあれば充分、ということか。

「退屈で死にそうだが、何かないのかよ聖斗さんよお」  
「……………」

前のディスプレイに集中しているのか、聖斗は何も答ええない。その反応に聞こえよがしなため息を吐く警備員。

淡緑髪の男の前に広がる画面に、英数字が光る。ずらつと並ぶワケのわからない文字の羅列に、遼平は暇つぶしにと見たことを後悔する。……痛い。主に、目と頭が。

「まったく、てめえの身くらいてめえで護れってんだよなあ。おにーさんよお」

遼平の半ば八つ当たりの言葉に、やっと固い口を開こうとする彼。キーボードを素早く叩く指を止めて。

「……………いい加減にしろ、蒼波」

低い無感情な声で、それだけ言う。聖斗……………ではなく白衣を着た澁斗が、肩こりを治すように首を傾けながら厄介そうに振り返った。

「貴様は兄上の警備をしている、フリだけでいいんだ。それくらい出来るのか」

「何を言いやがる、俺はこれでも演技派だぜ？ てめえこそ、そんなしかめっ面じゃあすぐに偽物だってわかつちまう」

「む……………。俺にどうしろと言っんだ」

「俺の口から言いたくねえけどよお、少しは笑えばいいんじゃないの？」

澁斗は、深く考える顔をして眉間にシワを寄せる。そして、頬の筋肉に力を込めてみる。……………が、自然と目の周りの筋肉も収縮され、普段の怖い顔がより一層ひどくなって終わった。

「……………お前、本当に不器用だよな」

「くっ、くう……………っ」

歯を食いしばって澁斗は必死な形相になるが、当然それでは笑顔にならない。顔のパーツこそ似ているが、本当に聖斗と双子なのだ

ろうか。遼平からすれば、普段澪斗の無愛想な顔を見慣れているぶん、聖斗の平和な笑顔の方が信じられない。

「わあ、わかつたからもうやめとけ。これ以上見てると俺が空しくなってくるから」

「く……何故兄上はあのような顔が出来るのだ……」

「なんでてめえはそんな顔しか出来ねえんだよ」という言葉を、空しすぎて飲み込む。感情と共に錆びついた顔の神経は、もう上手く動かせないらしい。同情からか、本音が、遼平は違う話を振った。

「で、てめえの兄貴は一体何を考えてんだよ？　こんな時に……」

こんな時に、弟と入れ替わって外出するなんて。提案する聖斗もどうかと思うが、許可してしまう澪斗も澪斗だ。弟の許可が下りた途端、聖斗は希紗を指名してうかれて澪斗の制服を着てしまった。眼鏡を交換すると、もう遼平達にもどっちがどっちだかわからなくなる。

「兄上が外出するには、外出願ひ届けが氷見谷勝人に許可される必要がある。勝人は多忙な為、その許可は数日経たないと下りない。……だから兄上はこうされたのだ」

「急ぎの用なのか？」

「いや、おそらく違うだろう。たぶん……外に出たかったんだ」

「なんだそりゃ？」

澪斗は顔を正面に戻し、膨大なデータの浮かぶディスプレイを見上げる。その瞳は遠くを眺めるように細められるが、遼平の位置が

らでは見えない。

「よほどの理由がなければ、兄上は本邸から出ることを許されない。この家から、出られない……」

言葉が徐徐に暗く、小さくなっていく。遼平は昨日一日の聖斗の日課を思い出していた。

朝、部屋に執事が行って、この地下室まで連れてこられる。夜になるまでココにこもり、執事が迎えにきたら私室に戻る。それだけ。『研究が忙しいのか』と問うと、聖斗は笑顔で『いつものことですから』と首を振った。あんな生活を毎日しているのか？　口々に日の光も浴びていない。これでは、まるで。

「まるで牢獄じゃねーか」

一日中こんな暗い部屋に押し込まれて研究をやらされて、外に出ることも許されない。御曹司だというのに、囚人のようなこの扱い。澪斗が『自由になりたかった』と言った意味が、今ようやく理解できた。上流社会とは、皆こんなものなのか？

「……俺の、せいだ……」

「紫牙？」

「俺のせいで兄上はこのような仕打ちを……」

独り言を呟くように、ぼろぼろと澪斗の口から言葉が零れる。その声は子供が弱ったように、少しずつ震えていく。

「お前のせいって……どうしてだよ？ てめえが家出したからかなんで」

「兄上は俺のために……自ら進んで……だからせめて俺は……」

「お、おい？」

「せめて俺に出来ることは、こんな事しか……だから俺はっ」

「おい紫牙っ！」

遼平は溇斗の肩を強く掴んで、振り返らせる。我に返って動揺した溇斗の瞳を睨み、思わず怒鳴っていた。

「なにらしくなく弱ってんだよ！ お前おかしいぞっ！」

「……っ」

「てめえらに何があつたのか興味ねえけどよ、そんなお前は認めねえ！ 俺が大嫌いな『紫牙溇斗』はな、どんな時も弱みを見せねえム力つく強がりなんだよっ！」

遼平の勢いに溇斗は押される。……が、少し間をおいて目に力を入れて、遼平を睨み返した。すっと一息吸って。

「……手を離せ愚か者、元より貴様に認められたくなどない。それと付け加えるが、俺は『強がり』ではない、実際『強い』……愚か

な貴様と違つてな」

掴まれていた肩の遼平の腕を払い、立ち上がる。「ンだっ」とニヤけた顔で拳を握り締めて前に上げる遼平。

「その『愚か者』つてのが気に入らねえんだよ。だいたいてめえはいつもなあ　！」

### 第三章『閉ざされた思い出』(4)

「ん〜、平和やわア〜」

いくつもの監視カメラの映像を前にして、真は頼杖をついてあくびをする。希紗が出かけてしまったので、ロスキーパー代表として監視の役目が真に回ってきたのだ。

聖斗の私室周辺も、開発部の付近も異常なし。外の監視映像も見ることが、時々氷見谷家の警備員が映る程度で、犯罪など全く感じさせない雰囲気がある。

後ろで氷見谷家の警備員達がざわつき始める。腕時計で時間を確認し、そろそろ警備の交代時間であることを知った。……真には全然関係無いが。

「にしても、こつ何にも無いと腕がなまるわア。監視なんて何年ぶりやろ〜、入社当時を思い出すな〜。あの頃はワイも若かった〜……」

しみじみと遠い目で頷く。注、彼は現在二十五歳です。

(…………お…………)

主人勝人の私室に奥方の蘭が入っていくのが、扉前の監視カメラから見えた。今日も勝人は本邸にいるのだろうか。少し後になって、執事の豊臣もノックをして入っていった。そういえば豊臣は勝人直

属の執事だったか、と思い出す。

氷見谷家の監視カメラは、室内には取り付けられていない。私室はプライベートの理由で当然だろうが、一階の趣味の部屋達にもカメラが無い。だから、映るのは廊下とどれも同じような両扉。

例外を除いては。

聖斗の開発部だけ、監視カメラが設置されている。音声こそ届かないものの、あの部屋だけは監視されているのだ。確か入り口にはロックもあつたし……流石は企業秘密、といったところか？

「うわ……っ！」

そんな事を考えていて、開発部の室内映像をふと見やると、中で警備員と聖斗（偽）が掴み合って何かケンカを始めているではないか。真はとっさに画面に背中を押しつけて隠す。

「ロスキーパーさん、何してるんですか？」

「い、いや、ちょっとパントタイムの練習を……」

「は？」

氷見谷の警備員に問われ、真は必死に前へ両手を振る。なんとかこの場を誤魔化さなければ！ ここでは警備員が依頼人を殺害しようとしているように見えてしまうっ！

「あ、そ、そういえば、そろそろ交代の時間とちやいますのっ？」

「確かにそうですが……」

「なら早う行ったほうがエエですよ。ここはちゃんとワイが居ますさかい」

「じゃあお願いします」と、あっさり氷見谷の警備員達は部屋から出ていく。平和ボケしているというか、あんまり緊迫感が無い。扉が閉まるのを確認して、真はくるっと画面に振り返り、無線機に向かって怒鳴る。

「こらア遼平っ、漣斗！ あんたら何しとんねんっ、こっちから見えとるのを忘れたか!？」

無線機のノイズの奥で、真への応答ではない罵り声が聞こえる。アンテナの方向を変えると、ノイズが少し和らいだ。そして、はっきりと向こうの声が聞き取れるようになる。

『この無愛想面がつ！ なんでてめえばかりモテるんだよ!』

『知るか！ 貴様こそそのふざけた顔はどうにかならんのかっ』

『これは生まれつきなんだよっ、しょうがねえだろ!』

『フン、なら貴様は生来の不良品か』

『んだとこのおーっ！ てめえっ、言っちゃいけねえ事があんだろっがあ!』

「……………」

激しい頭痛と胃痛が真を襲う。一体何が原因でこなくなくだらない口論をしているのか…………とりあえず、今彼が部長として出来ることは。

「この…………アホどもがあア!! 自分の歳を自覚せんか！ 小学生かあんたらはアっ!」

『だってよ真！ こいつが「いい加減貴様は森に帰れ」とか言うん

「だぜ!?!」

『俺は本当の事を意見したまでだ。真もそう思っただろう?』

「あゝ、なるほど……って、そうやなくて! ケンカするなってワイは言いたいのに!」

『真てめっ、否定しろよさっきの言葉は!』

『それみる、やはり真実だろう』

「いや、だからケンカは……」

真の言葉は再び展開しだした罵声に遮られ、もう届かなくなる。

純也は屋敷内を警備しているはずだし、ここは真自らが行くしか……

…と考えていた時。監視室のドアが開いた音がした!

「あれ? ロスキーパーさん何してるんですか?」

監視カメラのモニターに全身で張り付いた体勢の真に、氷見谷家の交代してきた警備員が首を捻る。思いつきりの速度で画面に身体を押しつけた真は、ぎこちなく首だけ振り向いて引きつった笑みを浮かべた。

「は……ははは……、いや、今ココに蚊が……」

「全身で潰したんですか? もう十二月ですけど」

### 第三章『閉ざされた思い出』(5)

やはり北風が寒いが、空は快晴。東京周囲を覆う汚れた大気のせいで色の薄い青空を、聖斗は嬉しそうに見上げていた。

「やっぱり外は気持ちいいですね〜っ」

うんと背伸びして、まるで高原の澄んだ空気を吸うように深呼吸する。遅れてビルの入り口から降りてきた希紗が、そんな彼をおかしそうに笑った。

「ちよつと大袈裟よ？ それより、本当に澪斗の服でサイズはぴつたりなのね〜」

制服から着替えて私服になった希紗が、やっぱり私服の灰色コートを着る聖斗を見る。聖斗は軽い外出用の私服を持っていなかった。中野区の事務所にまで来て澪斗の洋服に着替えたのだ。わざわざ私服に着替える、その理由は……。

「では早速、よろしくお願いします」

「よし、まかせてっ。東京案内ぐらい楽勝よ!」

……つまり聖斗は、一度東京に出て遊びたかったわけ。その為に、弟に身代わりを頼んでまでココに来たのだ。一番遊んでくれそうな希紗を指名して。

「何処か行きたい所とか、リクエストはある？」

「僕、一度巣鴨に行きたかったんですよ。『とげぬき地蔵』ってものを見てみたくて」

「巣鴨って……あそこにはお年寄りしかいないわよ……。ほら、新宿とか六本木とか、東京タワーとか」

「新宿って何か拝めるんですか？」

「いや、だからそうじゃなくて……」

東京観光の意味が、この人物、明らかにズレていると思われる。情報が遅れているのか、元々知らないのか。ここは若者として正しい遊び方を教えてやるべきだと、希紗は勝手に観光計画を立てた。

「まあ、とにかくついてきて！ 絶対に楽しくするから」

最寄りの駅まで歩いていき、電車で新宿に向かうことにする。希紗は初めて切符を買う聖斗に手順を教え、きよるきよると嬉しそうにホームを歩き回る彼を止め、子供のように電車内で窓に両手を張り付けて外を見る男に苦笑していた。

本当に、全部が初体験なのだ。当たり前前の日常の、全てが。

残念そうに電車を降りる聖斗を引っ張り、若者の溢れかえる街へたどり着く。この街は比較的表社会側の街で、治安も悪くない。確か、この周囲を裏で支配していたグループは三年ほど前に弱まったはずだ。

「わあ、若い人がいっぱいですね。東京っていい所ですね！」

「とりあえずココは、ね」

裏を知っている希紗は、思わず苦笑を漏らす。知らぬが仏、というやつだろうか。

まず歩いてみたい、という聖斗の希望で、露店が広がる道を二人で歩いていく。何度も希紗に振り返り、聖斗は「あれは何ですか？」とか「あの店は何を売っているんですか？」などと指差しをしながら尋ねてくる。希紗は一つ一つそれを丁寧に説明し、店に入ったりした。

立ち寄ったアクセサリーを扱う店で、聖斗は興味津々に細工品を見る。様々な色の透明なビーズや、十字架をかたどったシンボルのついたネックレス、それぞれの誕生石が散りばめられた指輪……大して高額な物ではないのに、聖斗は芸術品を前にしたように恐る恐る触れてみる。ふと希紗は横の棚を見て、シルバーの腕輪を取り上げた。銀の鎖の端に、緑の星がついている。

「これなんかどう？ ほら、この星の色、聖斗の髪の色と同じ」

「この星……ダヴィデの星ですね。希紗さん、こういうのは贈る相手を考えないと」

「え？」

笑みを零して、聖斗は希紗の手からチェーンの腕輪を受け取った。六つの頂点が輝くクリアグリーンの星が、店の照明で反射する。

「……でもせっかくですし、僕がいただきますしよかね。いやあ、澪斗に悪いなあ」

悪戯っぽく希紗を見て、聖斗はそれをレジに持って行ってしまっ。やっぱり慣れない手つきでお金を支払い、早速その腕輪をはめて戻ってきた。

「ねえ、『ダヴィデの星』って何？ どういう意味？」

「ふふふ……、『ダヴィデ』っていうのは、ヘブライ語で『愛された者』という意味なんですよ。希紗さんの愛、しっかりいただきましたからね〜」

「え、ええっ!? ちょっと待って! 誤解誤解〜っ!」

希紗の手が届かないように、聖斗は腕を上げて子供のようには逃げていく。そんな深い意味は無かったのに、からかわれて彼女は顔を赤くする。

「じゃあ、次はあそこに行きませんか? ほら、もう諦めて」

「聖斗ーっ」

希紗の反応を楽しそうに笑ってから、聖斗はもう一度自分の手首に巻かれた鎖と……その先の星を見やる。引き上がった口元は、雑踏に紛れて誰にも聞こえない眩きを落とした。

「その通りですよ、『ダヴィデ』………また聖書が示す意味を、『凶悪者』。僕に合っているのかもしれない」

「聖斗、何か言った?」

「いいえ、何も言ってませんよ。……あ、アレは何ですか? 何でしょう、あの建物、変な形してますね〜」

いろんな初めての物を前にして、聖斗は興奮したり驚いたりして

すぐどこかに行ってしまう。大人だからこそ、新しい物に戸惑うの  
だろう。

(……漣斗も、こうだったのかな……)

ふと、希紗はそんな事を思った。氷見谷の家から出た時、漣斗も  
右も左もわからない全くの世間知らずだったのだろうか。たまに常  
識が無いな、と思ったことがあったが、それにはこんな理由があっ  
たのか。

やたらと強い自尊心も、あまりの不器用さも、大富豪の家柄故か。  
いや、でも聖斗はとても物腰柔らかい人物だし……誰に似たのだ？  
この双子、やっぱり似ていない。

「さん、希紗さん？ どうしました？」

「あ、ごめんごめん。なに？」

「いや、なんだか考え込んでしまわれたようだったので。僕、うか  
れすぎでしょうか？」

希紗を気遣い、聖斗は反省するような顔をする。弟と違い、人の  
感情に敏感らしい。

「違うの。いいのよ、聖斗は初めてなんだし、うかれたって。存分  
に楽しんじゃってよ」

「ありがとうございますっ」

心の底から嬉しそうに、聖斗は微笑む。その笑顔に心拍数が上が  
るのが、希紗自身、自分でわかった。違うとわかっていても、その  
顔に、惹かれる……。

澪斗も少しぐらい、笑えばいいのに。そうすれば人から好かれるのに、心を閉ざして笑顔を忘れている。せつかく自由を手にしたのだから、笑っても良さそうなものではないか。兄は束縛の中でも、笑顔を保ち続けているのに。

「やっぱり素の性格なのかしら……」

ボソツと、思わず考えが漏れてしまう。「え？」と聖斗が振り返ってきたので、希紗は慌てて首を振った。

「……希紗さん、今、澪斗のコト考えてたでしょう？」

「え、え、い、いやっ、そんな……」

「わかりやすいですね、希紗さん」

すっかり見抜かれている。あなどってはいけない、この人物は、一見ただの世間知らずだが、本当は弱冠二十二歳の天才科学者なのだ。知り合って数日で、相手の人間の性格や感情の動向を察することのできる才知をも持つ。

「澪斗が、どうかしましたか？」

「いやあ、その……澪斗っていつも無愛想な顔してるから、あれって子供の頃からなのかと……。ほら、聖斗は明るいし」

「なるほど。確かに澪斗は昔からあまり愛想が無かったですね。…

…でも、子供の頃は笑うこともあったんですよ」

「ええー……あの澪斗が？」

澪斗の笑顔が未だに想像できない。全く同じ顔で柔和な表情をした兄がここにいるのに、それでも、だ。

「まさか、小さい頃からあんな怖い顔してませんって。でも、澪斗

は昔から変わらないトコロもありますね。生真面目なトコロとか、堅物なトコロとか」

「私が言うのもなんだけど、警備員にむいてるのかしら、漣斗って？」

「あながちハズレてはいないと思いますよ。子供の時から、僕は漣斗に護られっぱなしでしたから。兄らしいことなんて全然出来なくて、無警戒だった僕を、漣斗はずっと背後から護っていてくれたんです。本当に、情けないですよね」

そんなことはないと、希紗は思う。漣斗の聖斗に対するあの態度は、決して情けない兄への同情からなどではない。

あの誇り高い漣斗が、兄にだけは敬意を表す。それは聖斗がとて大切な人だからだし、きっと精神的な支えにもなってきたのだろう。存在してくれているだけで感謝できる人……たぶん、聖斗は漣斗にとって、そんな人なのだ。

「それに漣斗が感情を捨ててしまった原因は……僕にもあるんです。大事な弟のたった一つの幸せさえ護ってやれなかった、僕に……」

「……？」

懺悔をするような聖斗を、ただ黙って見ていることしか出来ない。それに希紗は、その原因が知りたかった。漣斗が感情を失った理由を……彼のたった一つの幸せとは？

意識がぼやけていくように聖斗はゆっくり口を開く。人混みの中、男はふと立ち止まった。

「……一番辛いのは澪斗なんです……あの方を、失って……それで」

突然聖斗の身体が揺らぎ、後ろへ力なく倒れていく。慌てて希紗は聖斗を抱きかかえ、ざわめく人々の中で聖斗の名を呼んだ。

「ちよっ、聖斗!?! どうしたのっ、聖斗ーっ!?!」

### 第三章 『閉ざされた思い出』 (6)

水の流れる音と視界をちらつかせる木洩れ日で、聖斗は目を覚ました。寝かされていた上半身を起こすと、額から濡れたタオルが落ちてくる。

「……………」

「あ、聖斗起きた？」

隣りのベンチに腰掛けていた希紗が、立ち上がって前に立つ。自分が寝ていたのは公園のベンチらしい、と状況把握し、聖斗はぼつと記憶を辿っていた。

「あー……………、僕、街中で倒れちゃったんですね。恥ずかしいな……………」

「どこか具合でも悪いの？」

「いえ……………。たぶん、太陽のせいですよ」

「太陽の？」

苦笑して、聖斗はベンチに座り直す。手の上に落ちた濡れたタオルは、希紗の物らしい。街の喧噪が遠くに聞こえ、前方にある噴水が日光にキラキラと反射する。

「僕、ここ数年あんまり外に出てなくて……………いきなり太陽の光なんか浴びたから、頭がくらくらしてきちゃったんです」

「いきなりって……………一時間も歩いてないのに？」

「あははは……………、すみません。いつも地下室にこもっていたもので」

冬の太陽で日射病になりかけるとは、よほどのことだ。日頃、同

僚達の並々ならぬ生命力を見てきている希紗は、危ぶむ。この人物、転んだだけで死なないだろうか？

「僕を運んできてくれたんですか？ 本当にすみません、こういうのって普通、男女逆ですよな」

「気にしないで。それより……さっきの話なんだけど」

「さっきの話？」

首を傾げる聖斗に、言うのを躊躇う。倒れる直前のことを覚えていないのか……でも聞きたかった、あの言葉の続きを。

「ほら、澗斗のこと……。『たった一つの幸せ』とか、『あの方を失った』、とか……」

「ああ、僕はそこまで言っちゃったんですね。それは……」

心の葛藤に悩んでから、聖斗は口を開こうと。決意した瞳を、青空へ向ける。希紗はベンチの隣りに座り、言葉を待った。

「皆さんが充分信頼に値する人達だと信じ、僕の口から言いましよ。う。本当のことを……僕達双子の目的を」

聖斗はポケットから、一冊の手におさまるほどの手帳を取り出す。その表紙の裏に、写真が挟まれていた。手帳ごと、そこを開いて希紗に手渡す。

写真には、二人の子供と一人の女性が写っていた。眼鏡をかけた笑顔の右の子供が、聖斗だろう。だとすればそっくりの左の無表情

な子供が澪斗。そして……二人の子供の肩に両手を乗せて優しく微笑む、緑色の髪が肩までかかった中腰の若い女性は。

「これ……二人が子供の時の？　じゃあこの女の方は、本当のお母さん？」

「……いえ、母は確かに出産直後に亡くなったんです。この方は、母親同然に僕達を育ててくれた人　叔母の、紫<sup>しが</sup>牙<sup>はるな</sup>春菜さんです」

「春菜……」

その名は、確かどこかで聞いたことがある。澪斗がふと漏らした、女性の名。

「全ては、今から十二年前の出来事です。僕達の目的は、春菜さんから……」

そうして、聖斗は風に揺れる噴水の水を遠い目で見ながら、ぼつぼつと語りだした。

## 第四章『レクイエム』(1)

### 第四章『レクイエム』

……あの方はいつも、僕達のことを優しい眼で見えてくれました。

僕達だけの花畑でのことです。

「ねえ澪斗っ、この花キレイだよ」

「兄上っ」

浅はかにもバラの茎をそのまま掴もうとした僕の手を払い、澪斗は先に棘のある茎を握り締めました。僕の手には棘が刺さるのを、小さな手で防いでくれたんです。……その代わり、当然澪斗の手は皮膚を刺されて血を流しましたが。

「澪斗！ 大丈夫っ？ ごめんっ」

「……これくらい、平気です……」

その当時僕達は十才ですよ？ 泣いたっておかしくない状況なのに、澪斗は強がって無表情を装ってました。僕は当然焦って、近くにいらっしやっただの方のもとへ走ります。

「春菜さんっ、澪斗が！」

「どうしたの聖斗、澪斗がどうかしたの？」

僕を落ち着かせる笑みで目線を合わせるようにしゃがんで、春菜さんは首を傾げました。肩までちょうどかかるくらいの濃い緑色の髪を揺らして、綺麗な顔で微笑んで。澪斗も歩いてきて、小さな花畑の前で春菜さんを前にします。

「澪斗が僕のせいで手をケガして……」

「手を？ 澪斗、私に見せて」

「なんでもない。心配するほどのものじゃない」

むすつとして手を後ろに隠す澪斗に、春菜さんは困ったような微笑みになりました。そしてしばらくじーっと澪斗と目を合わせていて、いきなり自分の頭を押さえたんです。

「痛いっ、なんだか頭が痛いわ……」

「春菜っ!?!」

澪斗は驚いた顔で急いで春菜さんの手に自分の小さな両手を当てました。それをしてやったという勝利の表情で春菜さんは素早く澪斗の手を握ります。

「澪斗、つゝかまえたッ」

「あ……。騙したな春菜っ」

血を流す右手をしつかり掴まれて、澪斗は悔しそうな顔をして。やっぱり僕達はまだ子供でした。春菜さんは澪斗の手をじっくり見ると、水で洗って白いハンカチを巻いて、いつものように。

「痛い痛い、飛んでけ」

「お、俺は痛くないっ!」

「澪斗いいなあ。春菜さんっ、僕も！」

「兄上！ そんな子供のよう……！」

「何言ってるの、澪斗も聖斗もまだまだ子供よ。私のだ〜い好きな子供達っ」

とても嬉しそうに、春菜さんは僕達二人を抱き締めてくれました。温かくて、優しい香りがして。澪斗はずっと顔を赤くしてましたけど。春菜さんは僕達を、死んだ母の代わりにどこまでも愛してくれていました。彼女にとって僕達は亡くなった姉の息子……ただの甥でしかないのに。

本邸の東端にある部屋は、僕達の遊び場でした。春菜さんがお父様に頼んで用意してくれた部屋で、室内の中央には花畑があつて。勉強や習い事の合間をぬつてそこで三人で遊ぶのが、僕達の楽しみだったんです。あの場所だけは、他の大人が入ってこられない憩いの場……。

僕達がまだ物心もつかなかった幼い頃に、お父様は再婚されました。相手は母と同じ、資産家の方。それが蘭様です。紫牙家も名高い資産家の一つだったんですよ。それなのに、春菜さんは姉の代わりにと氷見谷家で僕達の教育係をかって出られた。

ただ……蘭様は、前妻の妹である春菜さんを良く思っているしやらなかった。そして、僕達のこと。

蘭様の、僕達双子に対する嫌悪感はよくわかりました。でも、蘭様が何か言おうとする度、春菜さんが誤魔化してくれたんです。僕達の前では、嫌な想いをさせないように。

……ただ、澪斗は知っていました。僕達の見えないところで、春

菜さんが蘭様に散々けなされているのを。澪斗はそれを僕には言わず、独りで蘭様を憎んでいたようです。僕がその事実を知ったのは随分と後のことでした。僕は、あまりに人を恨むことを知らなかった……。

だから、蘭様の従者の目もあつて、僕達はいつもあの部屋で遊んでいました。澪斗はずっと春菜さんを気遣っていた……そんな感じがします。もちろん僕も春菜さんが大好きでした。実の親子以上に愛していたのでしよう。

ですがそんな幸せは、ある日突然崩れ落ちます。あまりにも急に、あっけなく、残酷に……。

## 第四章『レクイエム』（2）

「兄上、今日は何処へ行くのですか？」

「えっとね、お父様の催される記念パーティーだよ。確か、中国に系列会社が設立されるお祝いなんだって」

執事の豊臣さんが用意してくれた真新しいスーツを着て、僕は答えました。澪斗は「わかりました」と頷いて、素直に着替えをします。僕の部屋で夜になるのを待っていると、やがて純白のドレスを美しく着こなした春菜さんが僕達を迎えにきてくれました。

「春菜さん、キレイですね！」

「ありがとうございます、聖斗。でもちょっと派手じゃないかしら」

「案ずるな、……似合っている」

春菜さんが僅かに驚いたように澪斗を見ると、彼はぎこちないながらも優しい眼をしていました。彼なりの、最高の褒め言葉だったのだと思います。

笑顔で僕達二人の頭を撫でて、春菜さんは本邸前に用意された車へ向かいました。運転手はいつもの豊臣さんではなく、知らない男性です。なんでも豊臣さんは、お父様と共に先に会場へ向かわれたのだとか。春菜さんを挟み、僕達は両脇に座りました。

夜も更けてきた暗闇の中、車は長いこと走りました。渋滞を避けるためか、人気の無いトンネルを通過し、抜けた頃。

「ところで春菜、何故急に予定が入ったんだ？ 記念パーティーの話など、聞いていなかったが」

「ええ、私も昨日いきなり勝人様に言われたの。蘭様が急用で来れなくなつて、その代理なんですって」

「……奥方が？」

蘭お母様の代理、というのが引っかけたらしく、澪斗は怪訝な顔をしました。今考えると、澪斗は相当蘭様のことを嫌っていたのでしょう。義理でもお母様であるというのに、いつも蘭様のことを『奥方』と呼んでいました。蘭様が僕達を子供として見てくれたことなど、一度も無かつたのは事実ですが……。

「蘭お母様、どうされたんでしょうね？」

「そうね、ご病気とかじゃないといいわね」

……あの時の僕達は、身に迫つた危機など全くと言っていいほど感じていませんでした。いつものように平和な時間を過ごしていた……なのに。

地揺れのように激しく、突如車体が揺れました。運転手が焦つてハンドルを切るのが見えて……次の瞬間には、大きく視界が横転していったんです。すごい音がして、それから目の前が真っ暗になつて……。

「……う、ううっ」

僕の喉から、意識の回復と共に自然と出る音。どれほどの間気を失っていたかは、わかりません。ふと、うつ伏せに倒れた僕の顔の前に小さな黒い水たまりが。

「せい、と……大丈夫……？」

上からの声に、僕はやっと今の状況が把握できました。頭上から滴り落ちてくる黒い液体は、うつ伏せの僕の身体をかばうように覆っていた、春菜さんの顔からの出血。僕の横には、同様に春菜さんにかばわれた澪斗が、まだ気を失っていました。

春菜さんの上には、潰れた車の屋根がのし掛かっっていて、自動車が横転事故を起こしたのだと気が付きました。もう車体は原型をとどめていなく、手を伸ばせばなんとか割れた窓から外に出られそうでした。

「春菜さん、これは……」

「わからないの……聖斗、あそこから抜け出して。澪斗も……」

子供の小さな身体のおかげで、僕は粉碎した窓から這いだししました。ガラスの破片に何度も身体を浅く切られながら、外に出て、周囲の惨状を見渡したんです。ただの横転にしてはひどく壊れた車体と、どこから発火したのかわからない小さい炎。あとは闇だけ、他は恐ろしく静まり返っていて。

「聖斗、お願い、澪斗を……」

春菜さんの微かな声で我に返って、腕を伸ばして気絶したままの澪斗を引きずり出しました。見たところ澪斗にはひどい傷は無さそ

うで……僕はそれでも冷静な判断が出来なくて彼を必死に揺すつたんです。

「澪斗っ、澪斗！」

「……あ……兄上？」

「よかった……。大変なんだ、車がつ」

「え……」

澪斗は急いで身体を起こし、瞬時に事態が理解できたようでした。そしてまず、「春菜は！？」と僕の肩を掴んで言っんです。

「まだ車の下に」

「春菜っ！」

言葉を最後まで聞かずに、澪斗は飛び出していました。車の割れた窓ガラスから、中へ腕を伸ばして春菜さんを引っ張るのですが……二人で力を合わせても、ほんの少し、春菜さんの顔が見えた程度でした。

「無理だよ澪斗っ、僕達だけの力じゃ！」

「兄上、周囲に大人がいないか見てきてください！ それまでは俺が……」

「わかった！」

トンネルの方向へ戻っていても人氣が無さそうだったので、反対側へ走っていきました。少し高い所まで行って……僕は絶望感を想います。不思議で仕方が無いほど、辺りには何も無かったんです。とても遠くに街の光が見えましたが……僕達は都市へ向かっていたはずなのに、どうして。

必死に冷静さを取り戻そうとして、深呼吸し、澪斗のいる事故現

場の方を見下ろして　異常に気付きました。車のガソリンが漏れて流れ始めていたんです。このままではやがて引火して爆発することが、子供の僕にも容易に予測できました。

僕が急いで駆け戻つてくると、澪斗達の声が聞こえてきます。

「おねがい……逃げて。はやく」

「馬鹿を言つな！　死にたいのかっ」

春菜さんは爆発を予期していたのです。まだ澪斗は気付いていませんでした……このままでは僕達全員が。

「澪斗っ！　もうすぐここにも引火する！」

「ですが春菜がっ！」

「れいと、せいと……聞いて……」

もう弱りきった声色で、春菜さんは口を開きました。最後の力で、なのにしつかりと。

「あなた達は生き延びてね……そうしてくれたら、私は何の悔いもないから。きつとこれは天罰かな……私、幸せすぎたもの。どうか氷見谷を……二人に幸福を……大好きよ、私の愛しい子供たち……」

澪斗の手を振り払った腕で、春菜さんは最期に僕達の頭をいつものように優しく撫でてくれて……手を落としました。

「俺は嫌だ！　春菜っ、貴女を……!!」

「聖斗、澪斗を……」

春菜さんの言葉の意を察し、僕は暴れる澪斗の身体を後ろから抱きかかえてその場を離れました。そして直後、ガソリンに一気に炎が点火して

「春菜ああああー!!!」

澪斗の絶叫は、轟く爆音に掻き消されていきました。車体の破片が飛び散り、猛烈な炎を伴って、澪斗を押さえている僕にも火の粉が降り注いで。

弟を押さえた腕が痺を感じて、僕はより強く腕に力を込めました。その時が……僕が最後に見た、澪斗の涙だったように記憶しています。

澪斗の瞳に愛する人の最期を焼き付かせた僕は、許されない劣悪者  
僕こそが、心無い卑怯者なのです。

#### 第四章『レクイエム』(3)

その惨劇から七年後、あまりにも急に漣斗は動ききました。

「そんなっ、家を出るってどういうこと!? 漣斗!」

「兄上、どうかお許してください」

いきなり『氷見谷の家を出る』と言い出した漣斗に、僕は当然驚きました。……いや、本当は心のどこかでなんとなくわかっていたのかも知れません。ですが、突然すぎたので。

「俺にはやらねばならぬことがあるのです。もう俺は子供ではありません……力を手にして、目的を果たします」

「目的……? それはもしかして、春菜さんに関わることなのかい?」

僕達双子には、不思議な連繋感覚があります。互いの感情や感覚を、たとえ離れていてもうつすらと共感できる……科学的な根拠はありませんが、事実なのです。それに、ずっと共に生きてきた弟の考えを読みとるのは、あまり難しいことはありませんでした。漣斗がああ真摯な眼をするときは、春菜さんのことを想っている時ですから。

「俺は、兄上にずっと黙っていたことがあります。春菜が亡くなつたあれは……確実に事故ではありません」

「……故意によって起こされたものだと?」

自然と潜めてしまう声量で僕が問うと、いつも以上に真剣な目つきで彼は頷くのです。

「あの時、俺は現場で不審な男を見ました。右手に狼の入れ墨をした、男です。俺と目が合った途端逃げ出しましたが……俺達以外にあの場にいた者は全員死んでいます、きっとあの人物が……！」

「でも、あの事故はタイヤの故障が原因で起きた、運転手の操作ミスということになってるよ？」

「あの場所で行きなりタイヤが故障して、あのタイミングでガソリンに誘爆したなんていう偶然に、兄上とて疑問を感じていたでしょうっ？　そして、あれが故意であった場合、それを仕掛けられる人物に大きな心当たりがある」

僕だつてその可能性は考えましたし、その場合の黒幕が誰か、一度ならずとも思案してしまつたことがあります。しかしそれは、なるべく考えないようにしてきたんです。

「俺達のことを邪魔で、今となつては実子に後を継がせたがつている人物　　氷見谷蘭……！」

「澪斗っ、憶測で言つていいことじゃない」

「しかし春菜が死んでからのあの女の態度で、わかるでしょう！？　俺達がいかにあの女にとって目障りな存在か……。証拠が無いなら、引きずり出せばいい！」

「何をする気だい、澪斗……？」

お母様への憎悪を露わにする弟を見て、背筋が凍り付きそうにな

つていきます。その後続くであろう言葉が、予想出来てしまうから。

「あれだけの事故に見せかけるとは、おそらくあの男は暗殺屋でしょう。『裏社会』なところには、そういった者達が集うと聞いています。俺は裏社会に潜り込んで、あの男を捜し出して……俺の手でっ！」

「澪斗そんな駄目だよ、危険な……！ 春菜さんはそんなこと望まない……！」

「俺が望んでいることです！ ……そうですね、俺は他人の考えなどどうでもいい！ 春菜が望まなくとも、俺はっ……！」

澪斗が僕に対してここまで激しくなることは、それまでありませんでした。僕はわからなくなってしまいました……弟の本当の心がそしてそんな自分に戸惑うのです。僕達はいつも一緒だと思っていたのに、いつの間にか澪斗は僕では理解できない人になってしまったのか、と。……どうしようもなく、それが怖かった。

澪斗は確かに昔から他人とは馴れ合わない性格でしたが、人をむやみに憎むような人間じゃない。ましてや、春菜さんの想いには絶対逆らわなかったのに、どうして そう、思いました。

「……社会は広いんだよ、そう簡単に犯人が見つかるとは思えない」「何十年かけてでも、俺は捜し続けます。あの日から、俺の生きる理由はこれだけ……！」

僕もあの時のことはずっと引きずっていましたが、忘れようと努力してきました。でも澪斗は、ずっと春菜さんを想いながら生きてきていた。僕は。

「春菜が死んだのは……俺のせいです。俺が氷見谷の子供でなければ……後継ぎ候補でなければ、あんな事にはっ」

「……それなら、僕のせいでもあるね」

僕達は双子なのですから。澪斗のせいだけじゃない。《僕達双子》のせいで春菜さんが亡くなってしまったのなら、僕が出来ることは。

「澪斗、僕は兄として、君に危険な事をさせたくない」

「……っ」

俯いて、澪斗は両手を握り締めていました。世界がみんな敵になっってしまったような、そんな痛々しい顔でした。僕は言葉を続けます。

「でもね、君の唯一の片割れとして、僕は僕の出来ることをしよう。君だけに危険な事はさせない。僕も違うカタチで協力するよ」

「兄上……?」

「澪斗の考えがもし当たっているとすれば、僕らが大人……後継ぎに近づきつつある今こそ僕達を抹殺しようとするだろう。蘭様は、その機会をうかがっているはずだ。でも澪斗はこれから家を出る。……とすれば、標的になるのは僕だ」

双子とはいえ僕は長男です、当然狙われるでしょう。なら。

「ならば、それを逆に利用すればいい。僕はね、今とても難しい研究を始めようとしているんだ。困難を極めるけど、成功すれば氷見谷に莫大な利益をもたらす。これを蘭お母様方に説明すれば、おそらく研究が成功するまで僕は殺されないだろう。その間、澪斗は裏社会で犯人を捜せばいい。僕の研究が先に成功すれば、用済みになったその時がまさに好機だ。上手くいけば、僕は春菜さんと同じ暗殺屋に狙われるかもしれない。その時は、澪斗を何らかのカタチで呼ぶから。どうかね？」

思いついた計画を口にする、澪斗はしばらくぼかんと口を開けていたけれど、はっと我に返ってまずこんな事を言いました。

「兄上そんな駄目ですっ、危険な……！」

「澪斗、それさっきの僕の台詞」

おかしくて小さく笑ってから、弟の目を見据えました。尋常ではない決意が見えて、僕も意志を固めることにします。……あの時澪斗に辛い想いをさせてしまった責任を、感じていたからでしょう。

こうして僕達は、お父様の部屋へ向かいました。

豊臣さんをお願いして、蘭お母様にも来ていただきました。「大事な用件なので」というお願いで渋々蘭お母様もお父様の部屋にいらしてくださいました。まだ幼い勝太君も、その場にいたと思います。きつと彼は覚えていないでしょうけど。

「何の用だ、聖斗、澪斗。蘭まで呼びだすとは……」  
「そうですね。くだらない用件ではないでしょうか？」

蘭お母様は相変わらずでしたが、お父様も首を捻っていらっしやいました。澪斗は、いつものあの膝をついた格好で無感情に言います。

「この度、俺は氷見谷の家から出たいと思います。名を捨てることを、お許しください」

「な……っ、何を言っているんだ澪斗？ 突然……」

「俺は、金にも権力にも興味がありません。この家にいたところで、俺は氷見谷に何の役にも立てません。どうか、俺を自由の身にしていただきたいのです」

「ん……しかしな……」

「いいではありませんか、勝人様」

当然躊躇うお父様に、蘭お母様が優しい声色で仰いました。僕達には見せたことのない天使のような微笑みで、蘭様は頷きます。

「確かに澪斗の言う通り、その家に生まれたからといって束縛するのはあんまりですね。彼が選んだ道なら、仕方ありません」

少し悲しそうに言う蘭様のこれが演技というなら、疑う目で見なければ、決して見抜けない迫真の演技でしょう。演じる僕らも、表情を崩しません。ここで目的がバレれば、双子同時に抹殺されかねない……！

「まあ、蘭もそう言うなら……」

「ありがとうございます。氷見谷の名を汚さぬよう、俺はもう氷見谷を名乗ることも、氷見谷としてこの土地に足を踏み入れることもいたしません」

「よろしいですわ。この瞬間から、私達は貴方の親ではありませんからね」

大事な人形を抱くように勝太君を撫でる蘭お母様は、一瞬だけ目を細めました。その感情が悲しみなのか喜びなのか疑心なのか……僕にはわかりませんでした。もしかしたら、わかりたくなかったのかも知れません。たとえ継母とはいえ、信じたかった。

「お父様、蘭お母様、僕もお話があります。僕はこれから、ヒミヤ産業の中で科学者として働きたいと思えます。後日また詳しい内容はお知らせしますが……僕が手がける研究は、きっとヒミヤ産業に大きな進展をもたらすでしょう。僕は経営学等にうつるので……氷見谷の後継者としてではなく、科学者として氷見谷に貢献したいと存じます。澪斗も家を出してしまうことですし……」

こうすれば必然的に後継ぎは勝太君になります。あまりにも蘭お母様にとって都合が良すぎる感じがあるのもわかっていました。それも計算の上です。蘭様の反応を見よう、と。

考える表情のお父様の横で、蘭お母様はふと僕達の背後を見ました。しかしすぐその視線を僕に戻して、うつすらと微笑みを浮かべます。

……何かの感情を堪えているように、僕には思えました。それは『歡喜』なのか。

「……わかった、聖斗、お前の意見も受け入れよう。お前には科学者としての才があると聞いている。そちらに専念させてやる」

「ありがとうございます、お父様」

澪斗ほどではないけれど、僕も深々と頭を下げました。話が終わり、澪斗は立ち上がります。

「それでは、さらばだ澪斗。何処へなりとも行くがいい」  
「はい」

彼はお父様に背を向け、一瞬僕の脇を横切りました。……その時、誰にも聞こえない小さな声で。

「……行って参ります、兄上」

「澪斗、どうか無事で……」

表情一つ変えず、僕達は互いの無事を祈っていました。背後に控えていた豊臣さんが扉を開けて、澪斗と共に出ていきます。

……僕達双子の目的は、その瞬間から始まりました。そして、それから五年が経った。

#### 第四章『レクイエム』(4)

語り疲れたのか、聖斗は深く長い息を吐いた。いきなりであまりに衝撃的な告白に、希紗はもう一度ゆっくり話を飲み込んでいく。

「えっと、つまり、依頼の本当の理由は……」

「……そうです。僕を殺害しに来るであろう暗殺屋に、復讐する為のもの」

澪斗の目的は《護る》ことではなかった。だから希紗達が来るのを散々嫌がっていた。復讐の邪魔をされなくなかったから……。

「どうか誤解しないでください。澪斗は……本当は優しい人間なんです。あの時春菜さんを見殺しにした、僕の方がよっぽど凶悪な人間で。あれから、澪斗は他人に心を閉ざすようになって……僕を護る為に、いつも疑心暗鬼になってしまつて」

希紗を見て、訴えかけるように聖斗は言う。その瞳は、弟をかばう必死さが窺えた。希紗は、ゆっくり首を振ってから微笑む。

「……知ってる。物凄く素直じゃないけど、澪斗が優しいことは知ってるわ。それに、聖斗も優しい人。大切な人の想いを受け取って、兄として弟を護った優しい人。二つとも、私が知ってる間違いない事実」

自信を持って断言する希紗に、聖斗は驚いた表情をする。希紗は、澪斗が優しさを持つ人物だと思っ  
いや、もしかした

ら真達も。ほんの僅かでも、滅多に見せなくても、確かに。

「だって私達、仲間なのよ？ たった四年でも、一緒にいた大切な仲間なの。だから、知ってる」

「…………… 澪斗がああ眼をした理由が、今はつきりわかりました。僕の開発部に入ってきた時の、澪斗の眼が」

「え？」

まだ見慣れないその優しげに細められる眼に、希紗は上がる心拍数を隠しながら問う。澪斗は思い返す瞳で、一度蒼穹を見上げて。

「先程も言ったとおり、僕達双子には直感的な意志疎通のようなものが可能です。僕が初めて皆さんにお会いした時、澪斗の眼は『真実を話さないように』と語っている気がしました。だから、僕も口裏を合わせて普通の依頼のように見せかけた」

「ごめんなさい…………… 私達、邪魔だったのよね……………」

澪斗にまで気苦労をかけたのは、自分達が出しゃばったせいだった。ただ、事務所での澪斗の反応が気になって、追いかけてきてしまった。最初から澪斗の言うことを守っていれば、二人の計画は順調に進んだだろう。

「いいえ、僕はそんな事を言いたくないじゃないんです。言ったでしょう、『澪斗がああ眼をした理由がわかった』、と。…………… 澪斗はこの復讐劇に、あなた達大切な仲間を巻き込みたくなかったんでしょ。僕達は、少なからず自分の死を予期しています。おそらく二人無事にはならないでしょう。そんな危険な勝負に、希紗さん達を巻き添えにしたくない。だから、澪斗は誤魔化そうとしたんです」

「そんな……二人だけにそんな危険なことっ」

「……ええ、あなた達ならそう言うと思いました。』一番辛いのは澪斗』……この言葉は、こういう意味だったんです。復讐をする澪斗にとって、今、護るべきモノがあるのは辛い。復讐は出来ても、命を犠牲にしても、全員を護るのは難しいでしょう。僕はもう命を捨てた気にいるからいい。でも、皆さんは……」

決して聖斗は希紗達を邪魔に思っているわけではない。ただ、弟にこれ以上負担をかけたくない、そんな想いが伝わってくる。

「どうか僕達のためだと思って、皆さんは早く氷見谷から逃げてくださいませんか。僕達の目的を知っていただいたのは、理解して引き返してほしかったからなんです」

「……」

それが聖斗の願いで、二人のためなら。澪斗が……それを望んでいるなら……。

《仲間》として、するべきことは。

「私は、逃げないわ。二人に恨まれたついでいい。私の仕事は《守護》なの、護られる方じゃない。元から私のことなんか気にしなくていいわ。聖斗も澪斗も、死なせない」

一番非力な彼女が言うのもおかしいかもしれない。でも、この守護業に誇りを持っているから。いつまでも護られる側じゃいけない。

「これはあくまで私個人の意志だけど。でも……きっと真達も同じだから」

純也は間違いなく二人を放っておけない。真も澪斗だけに危険なことはさせない。遼平は……たぶん、『逃げる』というのが嫌だと思っ。『逃げろって言われて「はいそうですか」っていくかよ。意地でも俺は帰らねーぞ』とか言うだろう。負けず嫌いだから。

「……この話をしてしまったのは、逆効果でしたかね」  
「聖斗でも予測できないことがあるのね」

真剣な顔が薄らいで聖斗に微笑みが戻る。何か小さく安堵したような、そんな顔だった。この五年間弟は不幸ではなかったと、そう思ったからかもしれない。

「不思議ですね……残念なはずなのに、何故か嬉しい」  
「聖斗も私達の仲間だからね。一緒に嬉しいのは当然っ」  
「そうなんですか？」  
「そうなのっ」

ピシッと親指を突き立てる希紗に、その指を真似てみる。きつとこの指の形は、こういう時に使うものなんだ……と、知りながら。

「さて、と。それじゃあこれからやる事はたくさんあるわね。早速準備しなきゃ」  
「帰りましょうか」

立ち上がった、二人はのどかな公園を後にした。

「 というわけで、皆さん、すみませんでした！」

聖斗の特殊生物学開発部。警備員達五人を前に、聖斗は深々と頭を下げる。事情の一部始終を語った、最後に。

「 なんや、そういう事やったんか。早く言えばエエやんけ、水くさいなア」

「 引き返しては……ただけませんか？」

「 逃げるって言われて『はいそうですか』っていくかよ。意地でも俺は帰らねーぞ」

希紗の予想通りの遼平の返事。本当にわかりやすい。

「 ごめんね聖君、僕も遼と同じ意見。絶対、二人を護るから」

「 一応支部のメンツもあるし、一度受けた依頼は確実に遂行せなあかんしな」

感情的ではなく事務的に述べる真も、たぶん口実にしているだけだろう。こう言えば澪斗が反論出来ないのを、わかっている。

「 僕はこれから、研究成果の修正プログラムを入力します。一日あれば充分なので……それまでは待機しててください。蘭お母様には、今から連絡をいれます。これで僕が狙われれば、全ては計画通りです」

「 完成後すぐ襲われれば、黒幕はあの奥方うちゅーことか」

もちろん、他の企業からの暗殺、というのも考えられる。だがこの開発部は、とても嚴重に秘密にされた部署なのだ、その可能性は低い。

そこでききなり「はいはい！」と拳手して一歩前に出た希紗が、何やら企んだ笑顔で人差し指を立てた。

「警備配置なんだけど、私に策があるわ。ちょっと特殊な、ね」

聖斗はそれ以来、寝ずに開発部にこもっていた。冬空が徐徐に暗くなってきた頃、そろそろ完成を見越して真と澪斗はロスキーパーの為に用意された部屋から出ていこうとする。

「澪斗っ」

真が扉から出ていってしまったのを追う澪斗に、希紗から声がかけられる。開発部で聖斗を警護している純也、そして遼平は外なので、部屋には希紗しかいない。

いつもの無感情な顔で、澪斗は黙って手を差し出した。このタイミングで呼ばれる時は、いつもコレしかない。

「……………」

「どっした？」

自分の前に出された手をじっと見つめる希紗に、澪斗は問う。『ノアのカートリッジを渡せ』というこの行為の意味が、わからない

わけではあるまい。渡されて、『今日の弾は？』と尋ねて、『内緒』とか言われるいつものやりとりを予測していたのだが。

「……ねえ、ノアは……必要？」

「貴様、何を言っている？」

日々うるさいぐらいノアを使えと言うのに、今日に限ってそんなことを言ってくる。その言葉の真意がわからなくて、澪斗は腕を下ろして俯く希紗を見た。

「だって……っ、澪斗は復讐をするんでしょっ？ 人を、殺しにくいんでしょ……？ ノアじゃ致命的な攻撃はできないから……」

「……だから、今の俺にとってノアは必要ではない、ということか？ 俺にカートリッジを渡す気は無いと？」

「そうじゃなくて……！ 私わからないのっ、カートリッジを渡しているのかどうか……。澪斗はずっと復讐をする為に生きてきた……でも澪斗にこれ以上人殺しはしてほしくなくて……。私っ、どうすればいいの!？」

「……………」

強い葛藤に悩んでいる希紗に、澪斗は俯きながら考える。

何故他人事なのにここまで悩む？ 自分の手がいくら血で汚れようとも、関係無いのに。何故そんなにも心を痛めている？ 理解できない……だが、どうしてか心が迷う。

「……………それは貴様が考えることではない」

再び手を差し出す。今度はしっかりと掌を開いて。

「その場で最も適切だと思う行動を、俺はとる。その時にノアが動かなければ話にならん。カートリッジを寄せ。……俺ごときの為に、貴様が悩む必要は無い」

最後の言葉に、希紗は泣きたそうに目を細めて澪斗を見る。目が合った澪斗の瞳は、無感情でも冷たさでもない、真剣さが宿っていた。

「任せるね、澪斗……」  
「当然だ」

ゆっくりカートリッジを手渡した希紗に、澪斗は素早く受け取る。すぐ背を向けて扉を押し開けようと取っ手を握り、ふと半分だけ振り返って言った。自然と口から出た言葉で。

「……他人事に傷つくな。貴様には関係無いんだ」

それは、どこまでも彼の意思に正直な言葉で。それが本音だとわかってから、やっぱり希紗は出ていく澪斗の背を見送ることしか出来なかった。

#### 第四章『レクイエム』(5)

「……待たせたな」

扉のすぐ脇の壁に背を預けて立っていた真が、背中を離して立つ。透斗が出てくるのを待っていたらしい。

「いや。……にしても、やっぱあんたら若いなあ」

「は？ 何を言っている。貴様、最近精神的に老けてきていないか？」

「悪かったなつ。地がこうなんや！」

先程の会話が聞こえていたのか、腕を組んでしみじみと言った真に、透斗が思っていたことを素直に口にする。確かに真には、昔から妙に大人っぽい部分や、中年臭いところがある。まあ、周囲の者の性格が幼いから目立つのかもしれないが。

「心が老いると、身体も老化が進むと言う。真、精進しろ」

「あんたに言われんでもわかっとなるわ！ っていつかワイまだ二十代やしっ！」

「人によつては二十代後半から頭髮が薄くなると聞く。染髪や度重なる過労は、抜け毛を促進するぞ？」

「ムカつくーっ！ 『度重なる過労』って、誰のせいやと思つとんのや！」

「誰のせいなんだ？」

また胃が痛みだした真は、腹部を押さえながら地団駄を踏む。飛びかかりたい衝動を必死に抑え、小声で「落ち着けワイ、落ち着けワイ……」と繰り返していた。

部長が精神的に落ち着いてから、二人は本邸中央部に向かうため、ここ二階から屋外を通る渡り通路を歩いていく。巨大な屋敷の長い渡り通路は、軽く直進百メートルくらいか。

ふと、外であるのに音楽が聞こえることに気付いた。屋敷内のBGMではない……人の歌声のような音。耳を少し傾ければ、よく聞こえる。高いソプラノの、優しい音色。その音は心を癒し、胸に響く。

「この音は……なんだ？」

「これは……もしかすると、アレやな」

笑みを漏らし、真は頭上を仰ぐ。ここからでは渡り通路の天井しか見えないが……。

「アレとはなんだ？ こんな曲は聞いたことが無いが」

「ワイも聞いたことは一度しかないけどな、アレは……遼平や」

「蒼波？」

これが遼平とは？ 確か遼平は、今ごろ屋根の上にいるはずだ。特殊な聴覚を最大限に生かすには物に音が遮られない場所に限る。だから広がった場所である、本邸の屋根の上で異常が無いか警備している。はずだが。

「なんでも蒼波一族に伝わる唄らしいんよ？ 綺麗やろ」

「唄だと？ この声は蒼波ではあるまい」

「《音の民》は、あらゆる人間の音域を出せる。いつもは普通の男の声出しとるけど、その気になればどんな声色も楽勝なんやってさ。

……にしても、遼平が今、コレを歌うなんてなア」

この優しいソプラノの音が遼平から？ 信じられない……というか、信じたくない。だが漣斗にとって、遼平だと思わなければ、これほどまでに美しく感じる音はない。

「蒼波め、警備をなめているのか……っ」

「違うと思うで。アレはな……蒼波の鎮魂歌なんや」

「レクイエム？」

「亡くなった人を想う時に、歌う曲らしい。蒼波に伝わる、魂鎮めの唄」

そんな曲を何故、今？ 鎮魂歌とは、本来、死んだ者の魂を鎮める為の歌だ。だとすれば、この唄は……。

「……これは春菜へ向けられているというのか……？ 馬鹿な、あいつは春菜のことを何も知らんだろっ」

憤りさえ感じる。何も知らない者に、鎮魂歌など歌ってほしくない。

「だから違うって。正確には、コレは春菜はんに向けられたモンやない。……蒼波の鎮魂歌はな、『残された者の魂を鎮める唄』なんや」

目を細めて哀しそうな表情をする真を、怪訝な顔で見る。ゆっく

りとした唄が響く中、真は説明を続ける。

「蒼波一族の考えによるとな、『逝った者は帰れない。そんな者達の心残りは、残ってしまった者達の心の傷。逝く者の不安、残った者の幸福の為に、生者へ慰めの唄を。そして、全ての生命に感謝を』それが、この鎮魂歌の真意なんやって」

「……ならば……この唄は」

「遼平のやつ、機嫌工工のかねえ。滅多に聞けへんから、よく耳に残しておき」

呆然と屋根の方を見上げる澗斗に苦笑し、真は流れる心地よい唄に聴き入る。生者の幸せを祈る言ノ葉と精神を安定させる効果を持った旋律が、心を強くさせてくれる。『音楽は人類の偉大な発明だ』と言った何処かの人物の名言は、嘘ではないらしい。

《音の民》と呼ばれるだけあって、遼平は歌に天賦てんぷの才を持つ。ただあの性格からいつて歌うことをあまり好んでおらず、真は彼の歌声を滅多に聞かない。ただ、ごく稀に歌ってくれる時、その表情は誰よりも優しい。……きっと、今も。

惜しむようにゆっくりと渡り通路を歩いていたが、ようやく扉が目の前までくる。渡り通路の寒かった北風が、両扉を開いた途端一緒に暖かい屋内へ流れ込んでいく。相変わらず人気のほとんど無い回廊を歩いていて、ふと澗斗が口を開いた。

「……真、貴様に訊きたいことがある」  
「何や？ 珍しいやん、そんな改まって」

言葉に重々しさを宿しているのを感じ、真は澪斗の横顔を見た。  
普段も冗談を含んだことのない顔だが、今は特に暗い。

「……《復讐》とは……どのような感じなんだ？」

「……っ！」

瞬間止まる呼吸、隠しきれなかった悲愴の表情。思い出すのは、  
十年前の惨劇。

#### 第四章『レクイエム』(6)

その問いの意味が、決してわからないわけではない。答えも、真は充分知っている。それでも、喉から音が一瞬出なくなつて……十年前を思い出す。

嘔き出す鮮血と、肉や内臓の悪臭、空気を裂く悲鳴、命乞いの嗚咽、そして物言わぬ斬り捨てた軀。真の記憶は、己に残酷なほどそれを鮮明に覚えていて。忘れたことなど一度も無いが、いざ思い出させられると強い感情が湧き起こる。

「貴様にとって過酷な問いであることはわかっている。答えたくなければ構わない」

「……エエよ、今回ワイに出来る事といえば、これくらいしかないやろ」

昔はよく見た、あの大人びた苦笑になる。澁斗とはまた違う、人を寄せ付けられない顔。優しく他人との接触を拒む、これもまた孤独な表情。

「つて言うつても、ワイはあんたほど頭良くないから全然正しい答えになんてならんけどな」

「この問いに正しい答えなど無いことを、俺も貴様も知っているはずだ」

「そりゃそうやなア」とまるで今気付いたような仕草をする。先に行ってしまった者として、仲間として、《同胞》として、答えなければいけない気がした。真の答えは……。

「…………あの頃…………、ワイは澪斗ほど理性を持ってなかった。頭ん中真っ白で、ただ人を恨んで…………殺しても殺しても、すぐ次の人間を殺したくなる。そして最後の仇をやつと殺した時…………何かワイの中で崩れて、全部が嫌になった。心は晴れんかった。ワイは、『両親の仇を討つ』という生きる支えを、その瞬間失ってしまったんやろな。だからもう生きる支えが無くて…………呼吸すら辛くてな。まるで…………そう、まるで父ちゃん達が死んだあの時と同じ絶望を再び感じて。段々生きてることが、一秒一秒が苦しくなってきた、死になくなって…………！」

澪斗は黙って聞いていた。真の言葉をしっかりと刻みながら、彼の辛そうな告白をじつと聞きふけている。己の答えも同時に探しながら。

「復讐は…………果たすまでは生きる意欲が燃えとるよ。でも終わった途端、その悪魔の感情を力に換えた代償に、心全てを奪われる…………だから、今ここにあるワイの心は偽物や」

本当の、生まれた時に授かった人間としての心は、もうこの胸には無い。だからどんなに喜んで、怒っても、悲しんでも、その感情は所詮偽物で。一度消え去った心は戻らない…………ずっと、そんな感じがしていた。

「…………それとこれはわかりきった余談やけどな、復讐は連鎖する。残された者が復讐を果たし、それによって残された者がまた凶器を手にする…………あんたには、まだ失えんモンがあるんとちゃうか？」

真が復讐をした十年前、彼には失うモノは己の命しかなかった。

だから、彼は強かった。だが今の澁斗には……？

「俺に失うモノなど何も無い。兄上も死を覚悟してらっしゃるのだ、俺達にはもう、何も残ってはいない」

「あんたを失いたくない人間がいたら？」

「邪魔だな」

澁斗は迷わなかった。真には、今澁斗が嘘をつく理由は無いと思われたし、その可能性も有り得なかった。彼は、復讐者なのだから。真はそこで初めて、あの澁斗の持つオーラに懐かしさを感じた理由に気付いた。昔の澁斗によくあった、あの誰も寄せ付けない冷たい空気は、真自身が過去まもっていたモノだ。そう、あの十年前に《復讐者》のオーラ、殺意を心に秘めた者の空気。だから知っていた……だから、触れられなかった。

「……ワイには、あんたの復讐を止めさせる権利も無いし、応援できる力も無い。だから、言えることは一つだけや」  
「何だ？」

立ち止まってしまった真に、澁斗は数歩進んで振り返る。真は強い瞳に、同じように険しい表情の澁斗を映す。

「……死なへんでくれ」

「……フン……」

その一言で充分だった。短い四年の間で、お互いのことは大体わかってる。改まっているんなことを言葉にしてみたが、結局伝えなかったことはそれだけで。邪魔だろうが迷惑だろうが、これだけは。

僅かな沈黙の後、二人が身につけていた無線機からノイズ音が聞こえてきた。誰かが回線を入れたらしい。

『みんな、僕だよ、純也だよ。聖君のプログラミング、終わったよ』

「おお、ありがとな純也。もうそっちに向かっているさかいに」  
『うん。……僕も警備位置につかせてもらっね』

回線の音が切れる。今の会話は希紗達にも聞こえたと思うので、準備した警備配置につき始めるだろう。

「さて澪斗、用意しよか」  
「ああ」

脚を速めて、二人の警備員は地下の開発部へ聖斗を迎えにいった。

## 第五章『偽りと銃声』(1)

### 第五章『偽りと銃声』

「兄上、早く……」

「まあ待ってよ澗斗。どうせ研究ディスクは開発部に置いてきたんだし……僕にも色々と準備があるんだからさ」

本人は急いでいるつもりらしいがとてもそうは見えない速度で、聖斗は支度を進めている。この私室から、真達のいる部屋にこもる準備だ。

「いくら蘭お母様でも、完成した途端に僕を殺すなんてこと、しないかもよ？ お父様だって怪しむし……数日は我慢比べになるかね」

「そうかもしれませんが、用心するに越したことはありません。それにあの女なら、やりかねない……!」

やはり気休めは通用しないことを、聖斗は察する。緊張している弟に、今はどんな言葉をかけても力になれないのだと、自分の無力さを噛み締めるが、表情には出さない。

何も、してやれない。

それは十二年前と……子供の頃と変わらないのか。この五年で更に弟は強くなって、自分は無力な兄のまま。誰かを護れるだけの力が、この手には無くて。

「澪斗あのさ……君は、僕を残して逝かないよね……？」

「兄上？」

「僕達は別々にならないよねっ？ 澪斗を失ったら僕は……っ」

「……兄上、俺は、」

思い詰めた感じの聖斗の言葉。再び肉親を失うのでは、という恐れ。振り返って弟を見つめる聖斗に、澪斗は鋭い瞳で言い放つ。

「俺のことは、もう死んだものと思ってください。本当は五年前のあの日から、俺達の繋がりは」

「澪斗？ そんな……」

「本当はもう、貴方を兄と呼ぶ資格なんて俺にはありません。俺は復讐者で、人殺しだ……」

その眼の色は突き放すような冷たさがあった。少し前までの人間としての感情を思い出しかけた声色とは、明らかに違う。

「澪斗……君は昔からそうだ……自分勝手だよ。護られ、残される惨めな僕の気持ちを、考えたことはあるかい!？」

「……」

「澪斗を失うということは、僕にとって心を半分奪われるのも同然だ！ 僕は君の兄だよ、たとえ何があったとしても！ 生を受ける時も、死を迎える時も、僕達は共にあるっ!!」

絶対に断ち切れない繋がり、命を共有した存在。その終わりが来る時も、一緒だと。聖斗はそう信じていて。両極にいる双子の共通点は、愚かしいほどに実直なこと。

声を荒げた聖斗は冷静さを取り戻し、俯く。

「……ごめん。わかってるんだ、澪斗が春菜さんをとて愛していたことは。そして僕は少しでもそんな君の力になりたい。けど理解してほしいんだ、僕も澪斗も、心を持った人間だということを」

受け入れられないと薄々感じながらも、必死に澪斗へ訴えかける。鏡に映った己のような弟は、困惑した顔をして押し黙ったままだ。

「僕らは心を持っているんだ、復讐の機械じゃない。自分のために喜んだり悲しんだりしてもいいんだよ。だから澪斗、どうか過去に縛られないで……」

言いたい事が、言わなければいけない事が多すぎて、聖斗は自分の頭の中で起こる混乱に首を振る。言葉の羅列が支離滅裂であることをわかりながら、それでも口は紡ぎ続ける。……残された時間が少ないことを、悟っているかのように。

「ごめんね澪斗、僕わけわからないよね。らしくないな、本当に……何かの予兆かな？」

「兄上……無理はなさらないでください。俺が必ず……」

無理をして苦笑する兄に、弟が腕を伸ばそうとした時、不意に異常な気配を感じた。室内に何かが転がり込んでくる音がして、直後、その黒い物体が白煙を噴き出すっ！

「これはっ？」

「兄上!!」

白煙と共に視界が歪んでいく頭痛に抵抗しながら澗斗は聖斗へ駆け寄ろうとするが、お互いが伸ばした指先寸前で二人の意識は途絶えた。

## 第五章『偽りと銃声』（2）

汚れた埃の空気を吸った喉の痛みと、何かに小突かれて身体が揺れる感覚で聖斗は意識を取り戻す。闇に目が慣れないので、把握できる現状は自分の身体が拘束され、床に座らされていることだけ。

「上、兄上、ご無事ですか？」

「あ……澪斗？ これはどうなって……」

「……先手を取られたようです」

「敵に捕まったってことか……。ここはまだ氷見谷家敷地内かな」

「おそらく。俺達が気を失ってからそんなに時間は経っていないように思います。……すぐ俺達を殺していないということは、場所を選んだか、もしくはは」

「気がついたかあ、長男次男」

徐徐に夜目に慣れてきた瞳は、部屋の窓を割ってこちらへ侵入してくる影に気付く。七、八人の覆面マスクをした男達は、立ち上がれない双子を取り囲んだ。

「外の警備員は大方始末してきたからな、助けは呼べないぜ、長男」

「貴様らが暗殺屋か……！ 縄を解けつ、勝負しろ！」

「はあ？ ……えーっと、情報では気が強い方が次男だったか？」

双子つてのは面倒だな……。おい次男、捕まってるって現実がわかってるか？ 誰が勝負なんかすると思うんだあ？」

嘲り、呆れた笑い声。強く唇を噛む澪斗が、拘束されながらも殺気を放つ。その気配に、覆面の男達は眉をひそめて。

「……確か、次男の方は厄介な警備員なんだよな？ こつちから先に始末していいんだよな」

「ああ、そのはずだ。あの人がある前に、殺そう」

『あの人』という単語に双子が反応する。その言葉が指しているのは、叔母を殺した暗殺屋か、もしくは黒幕か……。

「情報によると……次男は銃を二丁持つてるはずだ。取り上げとけ」

一人が、澪斗の腰から銀と黒の銃を抜き出した。他に銃を持つていないことを確認し、一番大柄な男が澪斗の首を掴んで細い身体を掲げる。

「澪斗っ！」

「あ……にうえ……っ！」

「そのまま次男は絞め殺せ！」

片腕で持ち上げられてしまった身体がもがくが、首を掴む握力は段々と強くなつていく。かすれる声で、それでも瞳に憎悪の殺気を浮かべて。

「貴様のようなクズの手で死ぬものか……俺にはやらねばならぬことがあるっ！」

「てめえ……負け犬の遠吠えが好きらしいなああ！」

大柄な男は額に血管を浮かばせて、空いた片手の拳銃で澪斗の右脚太ももを撃ち抜く！ 苦痛の悲鳴を堪えたのか、それとももう声が出せないのか、くぐもつた音を出す喉。

抵抗していた身体の動きも、鈍くなつていく。

「じゃあな、次男」

心地良いほどに澄んだ銃声が、響いた。

冷たい地下へ降りる階段に、一つの足音。この屋敷に似合い、この先の地下室にはそぐわない漆黒のドレスをまとった女性。彼女が持った盗聴器から聞こえる、ノイズと会話。

『遅いなア、澪斗と聖斗』

『何やってんだよ、紫牙のヤツ』

『せつかく計画の準備したのに』

『何かあったのかな……僕、迎えに行つてこようか？』

『面倒だからやめとけ。そのうち来るだろ』

「……本当に、愚かな者達ね」

つい口元が引き上がる、ドレスの女性……奥方、蘭。その微笑みは、天使にしては禍々しく、悪魔にしては美しくて。やがて、地下研究室の扉が眼前に。

扉を開けるための暗証番号などとうに知っている。厚い扉が開くのはすぐで、闇の研究室へ入る。

「ディスクは………コレね」

暗闇に慣れない目で、なんとか手探りで探し当てる。メインコンピュータの横に、丁寧にケースにしまわれたディスクがあった。

「私の勝ちよ、忌々しいガキ共」

第五章『偽りと銃声』(3)

部屋に反響した銃声は、紅を巻き散らし、目を見張らせる。

「な、んで……長男が!？」

縄が勝手に解け、座り込んでいた聖斗の手にある銃から上がる硝煙。その弾丸は、澪斗の首を締め上げていた男の腕を貫通して。

澪斗が片脚で着地しながら縄を引きちぎり、聖斗は四角の眼鏡をかけ直す。

「まったく、行動が遅えんだよてめえは。しかも台詞棒読みじゃねえかバーカ」

「貴様こそ、全く似ていない。俺はそんな馬鹿面ではない」

「ンだと？ 俺は演技派だって言っただろ？」

にやついた口元を引き上げる弟と、手にした銃に一発分の弾丸を装填した後に腰のホルスターに戻す兄。どちらも声色が先ほどまでと違い、《澪斗であった》方が、顔を剥がした。

「つかあー、息苦しいんだよこのマスク」  
「フン、それくらい耐える愚か者が」

「てめえはいいよなあ、そのツラのまんまでいいんだからよ、紫牙」  
「？」

「兄上の表情を真似るのは、マスクをかぶるより至難の業だ、蒼波」  
いつにないくらい真面目に警備服を着こなしたのが、遼平。  
白衣の下にホルスターを隠し付けていたのが、澪斗。

「変装……！？ お前ら、いつからっ！？」  
「聖斗の部屋に入ったのは俺らだ。あの部屋を外からてめえらが覗いてた時点で、既に入れ替わってたんだよ」  
「あの会話で騙しきれるとは、愚かな者どもだ」

澪斗がノアを構え、遼平は指が出る革の手袋をはめる。まだ啞然としている男達を二人で嘲笑してから、《掃討》を始めた。

「よくもこの俺様を撃ってくれたなあっ」  
「貴様ら雑魚に、マグナムでは勿体ないな」

左脚で顎を蹴り上げ、中途半端な紺髪を乱しながら動けない者に殴りかかる遼平。一方で、今回は針のような弾丸を黒銃から首もと脈に目掛けて撃つ澪斗。麻酔針のようなモノらしい。  
この二人に七、八人という人数では、裏の人間でも少なすぎる。一分としない内に、覆面の男達は全員床に伏していた。

「弱っちいなオイ。これで終わりかあ？ ってか、ココどこだよ？」  
「……おそらくココは、屋敷東端の部屋だろう。かつて兄上や春菜

と居た記憶がある」

部屋の中央には、花壇だったらしき跡。まだこの部屋が光で溢れていた頃、美しいバラが咲いていた。その記憶に、遠い日、花に切られた手を思い出す。今となってはあらゆる人間の血で汚れた、その手で。

しかしその思い出を振り切り、漣斗は一人の胸ぐらを掴んで、睨む。

「貴様らが、十二年前に春菜を殺した暗殺屋か？」

「ち、違……、それはあの人……！」

「《あの人》？ その者の名を言え……！」

「その必要はございません」

丁寧でゆつくりとした声色と、銃声があったのは同時で。横に立っていた遼平が、苦悶の声をあげて倒れていく。

「蒼波……！」

「紫牙っ、ボーっとしてんじゃねえ！」

次の瞬間には、伸ばされた遼平の腕が漣斗を突き飛ばす。漣斗が居た場所、その床に、鉛弾が突き刺さっていた。

闇に慣れた澁斗の瞳には、あの右脚太もを再び撃ち抜かれて床に膝をついた遼平と、彼を撃った者が持つ銃の光が映る。

堂々と部屋の扉から入ってきた人物、その手に狼の入れ墨をした男、それは。

「貴様が……貴様が春菜を、俺達を狙っていたのか？」

豊臣！

## 第五章『偽りと銃声』（4）

「そこまです、蘭お母様」

急に部屋の蛍光灯が点き、奥方蘭の鼓動が跳ね上がる。驚愕の瞳で研究室の扉へ振り返ると、そこには。

「なっ何故、あんたがココに……！」

「説明しましよーか、奥方様〜？」

白衣の聖斗の後に入ってきた希紗が、不敵な笑みを浮かべる。どこか悲しそうな純也と、険しい視線を向けてくる真が扉を塞ぐように立って。

「今頃暗殺屋に捕まったフリしとんのは、澪斗とウチの社員の遼平でっせ」

「台詞の台本は、聖斗監修の下、私が作りました〜。どんな声色でも真似できる遼平の能力と、私の特殊メイクで。二人とも背丈近いし。ちなみに、私達の部屋に取り付けられた盗聴器の前に声を録音したテープを流してるんで、それも罠で〜すっ」

見事に罠にはめたコトが嬉しいのか、勝ち誇った表情の希紗。それに反比例して、顔面蒼白になる蘭。

「蘭お母様……どうか、僕達から手を引いてください。貴女には手を出しませんし、勝太君が跡取りで構わない。澪斗と僕を狙わなけ

れば、僕達はもう何もしません」

訴えかけるような、聖斗の物憂げで切実な声。それを、奥方は引きつった笑みで嘲った。

「ふ……ふふふふつ、相変わらず馬鹿なガキ！ 誰があんた達から手を引くって？ 私が手を引く時は、あんた達が死んだ時よっ！」

ヒステリックに響く嘲笑に、聖斗はどこまでも悲しそうに視線を落として。

「ああ忌々しいっ、全くもって忌々しい！ あの女と一緒に死ねば良かったものを、いつまでも生き続けて……あんた達なんか、誰からも愛されていないのに！！」

「……黙んなさいよ、オバサン」

木刀を握った真より、拳を握り締めた純也より、早い言葉があった。暗い、暗い、怒りを込めた音。

「『誰からも愛されていない』？ ふざけんじやないわよ、二人を愛していた人を奪ったのはアンタでしょ？ ……それに、まだいるのよ、愛している人は。どんなに殺したって、愛されるべき人間はまた愛されるの！」

希紗の叫びは、彼女の純粹な激情から。二人の愛する人を、二人の未来を、あの人の感情を奪った、その怒り。あの孤独な顔を思い出すと、何故か無性に泣きたくなる。

「何がわかると云うのよ小娘……腹が立つわ！ あの女も！ ガキ共も！ 紫牙の血を引く者など、氷見谷にはいらぬ……！」

「蘭お母様……どうしても、あなたは僕達のことを……！」

「本当ならこの手で殺してやりたいのよ！ 勝人様も、氷見谷も、私だけのものなのにつ！ その口で私を『母』などと呼ばないで！」

俯き、震えた声で静かに、「そうですか」とだけ呟く。そして白衣のポケットから取り出したモノを、蘭へと放物線を描いて投げ渡す。

「なっ、何の真似よ……コレ……！！！」

「ならば、それで僕を殺してください、蘭様」

澪斗が持っていたモノと同じ型の、拳銃を。

「はい、私めが春菜様の仇の暗殺屋でございます」

場違いなほどつやうやしく、頭を下げる執事、豊臣。しかし確かにその片手には、狼の入れ墨がされた素手には、銀色に光る銃。

「く、く……くくく……そうか、そうだったのか」  
「紫牙……？」

聞いたこともない、澁斗の笑い声は静かに残響する。己を嘲笑うかの如き、その微かな音。

「愚かだ、実に俺は愚かだ。五年もかけて探していた人間が、これほどまでに近くに居たとは。いつからだ？ 貴様が暗殺屋などをしていたのは？」

「私は元より、しがない殺し屋風情でありました。勝人様に専属の暗殺屋になるよう依頼され、表では執事をしながら、旦那様の邪魔になる人間を裏で殺してまいりました。しかし蘭奥様には気付かれず、密かに聖斗様、澁斗様の暗殺を依頼されたのです。勝人様はご存じではありません」

「……いや、おそらく勝人は気付いていただろう。だが、それを蘭に責めて、その腹いせに蘭が真実を社会にバラすのを恐れたのだらうな」

「そうかもしれません。ですが、私は依頼を遂行するだけです。今度こそ、お二人を殺してみせましょう」

「良かろう、やってみるがいい。この時こそ俺が望んだ瞬間だ」

ノアを腰に戻し、リボルバー式マグナムを抜く。二人同時に撃鉄を上げ、銃口を向け合う。

「……その銃……私と同じモノですか。奇遇ですか？」

「あえて貴様と同じモノにしたのだ。あの現場で貴様がその手に持っていた銃と、同じモノに。ふざけたヤツだ、暗殺にそのような銃を用いるとは」

おそらくあの現場で、派手に車が横転するように照準を定めて撃つたであろうその銃は、射撃に向かないリボルバー式銃。ライフルなどの方がよほど暗殺に向いているのに、あえてソレを使ったのは、よほど己の腕に自信がある者が。

そしてその『ふざけたヤツ』を探し求めた澁斗は、憎しみを忘れぬように同じ銃を持って。大切な人間を奪った者を、大切な人間を護れなかった自分を、忘れぬように。

「「覚悟」」

それはどちらに死を覚悟させる言葉だったのか。

それはどちらも死を覚悟した声だったのか。

銃声は、二度鳴った。

## 第五章『偽りと銃声』(5)

その音が重ならなかったのは、澁斗が一刹那だけ速かったから。しかし彼の銃弾は豊臣の銃身に当たっただけで、豊臣の銃弾は確かに澁斗を貫通した。

ただし銃身に弾が当たったため、照準はずらされる。狙った左胸ではない、銃を握っていない澁斗の左腕へ。

その一発を見た豊臣は、眉間にシワを寄せて、懐で隠していたもう一つの銃を取る。

「それが貴様のやり方か」

「暗殺業に、殺り方のルールなど無いのですよ！」

二丁の拳銃が、澁斗を狙う。澁斗も構えるが、明らかに勝負は目に見えていた。それでも、それでも仇を討ちたい気持ちは変わらないのだろう。己の命など、惜しくはないのだから。

何かが光った一閃は、澁斗にも見えただろうか。

ほぼ同時に引き金を引いたために、わからなかったかもしれない。ただ、

「勝負にそんなのヤボじゃねーか、ジイさん？」

ただ、そんなふざけた声は聞こえたかもしれない。

床で立てなくなっていた遼平が、咄嗟に手元にあったガラス片を

投げた。

そのガラスに刺された豊臣の片手から発砲出来なかった銃が落ち、もう片手の銃は澁斗の放った銃弾に弾き飛ばされて。

「……終わりだな、豊臣よ」

一瞬で丸腰にされ自失状態になった暗殺者に、躊躇いなく銃口を向け、引き金に力を込める。

銃声が四度、連なった。

「……いいのかよ、紫牙」

「これで俺の目的は果たした。終わりだ、全て」

「まだ全部終わってねーんじゃないかねえ？」

その言葉に、ふと兄の顔が過ぎって、「そうだったな」と呟く。真達がついているから心配はいらないと思うが、黒幕とどうなっているか気になる。

「ところで蒼波、先ほどのガラス片はどこから出した？」

「あ？　なんか手元に落ちてたんだよね……コレは……？」

「フォトスタンド？」

粉々に砕けたガラス片の下に何かを見つけた遼平がふつと口元を引き上げる。軽くにやけた声で。

「……てめえは愛されて望まれてたんじゃねーか、親に」  
「なに？」

遼平が腰を下ろしたまま澪斗に手渡した一枚の写真には、微笑んだ二人。

緑色の髪を流して幸せそうに微笑む妊婦と、椅子に座ったその妊婦の肩に片手を置いた男。おそらく、聖斗と澪斗の本当の母親と、勝人。

「ああ……そうだったらしい」

暗闇の部屋の中、俯いた澪斗の表情は見えない。ただ、写真を持った指に、力が込められていた。

「……………なんだよ」

ふと、写真を胸ポケットにしまった澪斗が、腕を下ろす。その手を訝しげに見やる遼平。

「……………貸してやる」  
「は？」

「手を貸してやる。貴様、その脚では立てんだろう」

先ほどからなんとか立とうとしていた動作に、気付かれていたらしい。いつもなら腹の立つその偉そうな口調で、しかし思いもかけなかった言葉を言われ、怒りより先に驚きが来る。

「……恩には着ねえからな」

「貴様に恩など着せるものか。ここに貴様を残すと面倒なだけだ」

澗斗の右肩を借りて、ふらつきながらも立ち上がる。脚を引きずって歩き出しながら、小さく「てめえも腕ケガしてるくせに」と聞こえないように呟いていた。

聖斗が何と言ったのか、誰も理解出来なかった。あまりに唐突すぎたのだ、その内容が。

「あ……あんだ、どこまで馬鹿なの！？ 『殺せ』ですって！？」

「ええ、僕は馬鹿ですよ。蘭様にとって僕が邪魔なら、あなたの手で殺してください。人に殺意を抱くのは自由ですが、実行したいのなら、それなりの覚悟が要るのです。……人を殺したいのなら、その手を紅く染める覚悟をしてください」

「それが有るのなら、どうぞ僕を殺してください」と、最後に付け加えて。真剣な表情で、殺しやすいように一歩踏み出す。

「聖斗っ、何言ってるのよ！」

「ごめんなさい、だけど、これが僕なりの覚悟なんです」

「あんたが亡くなったたら澪斗はどうすんねん！」

「……澪斗は……彼は生かしてください。もう、これ以上彼がこの家のコトで束縛されるのは、嫌なんです。氷見谷と澪斗の狭間を繋ぐ《僕》が消えれば、彼は本当に自由になれる」

「澪君は、そんなの望まないよ！ 悲しむよっ！」

「……最後の、僕の我が儘です。これが結果的に、きっと彼のためになる……」

聖斗は警備員達に振り返らなかった。ただ弱々しくも微笑んでいるであろうことが、誰にもわかった。

「蘭様、ご覚悟はできましたか？」

「わ、私は……っ」

ガクガクと震えながらも、奥方は慣れない手つきで撃鉄を起こした。両手で銃口を上げる。

「さよなら」という言葉は、一体誰に届いただろう。

## 第五章『偽りと銃声』(6)

「何をされているのです、兄上？」

穏やかで、丁寧なのに、険しく響くその声は、その場全ての人間の呼吸を止めた。

「れ……いと……」

聖斗が振り返ると、真と純也が呆然と空けた空間に、遼平に肩を貸した澪斗。真っ直ぐ厳しい瞳で、ただ、兄を見つめていた。

だが、視線だけで何かを兄に訴えたのだらう、澪斗はすぐに蘭に振り向く。

「蘭、豊臣は俺が始末した。ここまでだ」

「まさか、豊臣があんたに！？ 死になさいよ……とつと死になさいよおお！！」

狂気と化した女の指が、引き金を引く。……が、照準が定まっていなかったために壁に弾丸を撃ち込んで終わる。

冷たく見下した眼で蘭を睨んでから、澪斗は左腕で何かを背後から引っ張り出した。

……ひどく怯えて震えた様子の、勝太を。

「母様……」

「勝太！？ そ、その者から早く離れなさい！」

澪斗は勝太を引き留める様子もなく、手を離されて少年は駆け出す。勝太は、母親の持つ銃に震えながらも抱きついた。

「母様がココに入った後に聖斗や純也が入って……俺、どうしたらいいかわからなくて、そしたらあの男が来て……」

「地下への階段の前で見つけたのでな、連れてきてやった。感謝しろ蘭、最期に息子に会えたことを」

それはあまりに残忍な慈悲。遼平の身体を真に預け、澪斗は腰から銀色に光る銃を抜く。

「春菜の仇、討たせてもらおう」

迷い無き銃口は、怯える女性へ。十二年の月日を隔て、ついに澪斗が望んだ結末が、今。

「やめるこの……っ、悪魔がああ！」

誰もが諦めたように見えたそこで場違いなまでに甲高い声で叫んだのは、勝太だった。瞳に涙を溜めながら、蘭の前に立つ……が、彼の背丈では当然足りない。母親の左胸へ向けられた照準を妨げるには、身長が足りない。

ところが、その勝太の行動は確かに蘭の死を防いだ。母親が、その息子を盾にしてしゃがみこんだのだから。

「しよ、勝太ああ……！」

「……蘭、貴様は実に外道だ。息子を盾にしてまで、己が命を繋げたいか」

その言葉に我に返ったのか、急に強く息子に抱きついた彼女を、それでも軽蔑した視線で睨む。澪斗が躊躇う理由など、どこにもなかった。

「ならば良かろう、息子と共に死ねば。俺は誰を殺そうと構わない、春菜の仇が討てるのなら」

怯えて震える母子を見下ろす彼の瞳は、今まで殺してきた者達へとは違う色。無感情ではなく、いつよりも激しい感情が渦巻く色。

「やめて澪君！ もうやめてよっ！」

ついに耐えきれなくなった純也が叫び、蘭と勝太の前に立つ。飛び出していった純也の背に遼平が何か言い放ったようだったが、その声は弱々しくて聞き取れなかった。

「どけ純也！ 撃たれたいのか！！」

「こんなこと……っ、誰も望まなかったのに！！ 聖君だってこんな望んでいなかった！ もう終わりにしようよっ」

澪斗が今齒を食いしばっているのは、それは決して迷いではないと誰もが断言できる。怒っているのだ、己が目的を妨げる者に。

「『もう終わり』だと？ この終焉は、その女の死をもって迎えられるのだ！ その畜生が死なぬ限り、俺の復讐が終わることはないっ！ 言っただろう、俺は『誰を殺そうと構わない』と！！」

仲間さえ、純也さえ殺せる、今の彼なら。それが誰にだってわかってるから、遼平は必死に純也の名を呼んでいた。一人ではもう歩けない脚で、立とうとしながら。

「復讐なんて、もう、やめようよ……人を殺すのに、正しい理由なんて無いっ！」

「貴様に……大切な人間を失ったことの無い貴様に、何がわかる！ 過去の無い貴様に、一体命の何がわかると言っただっ！！」

「……っ！」

それは、その言葉は、純也の心の最も弱い部分を抉る音だった。あまりに残酷な言葉、しかしその咎を誰が責められるだろう。

責められる者など、いないのだ、ココには。純也以外の仲間達の脳裏には、過去に失ったそれぞれの大切な人間がよぎる。大切な人間を失った時のあの絶望、憎悪。あの感情を治められる者が世界にいないことを、彼らは知っている。

だから、誰も、何も言えなかった。

ずっと握り締められていた純也の拳から、力が抜ける。力なく垂れた身体は、小刻みに震え始めて。

「なら……それならさ……… 澪君にはわかるはずだね、大切な人を失う痛みが。僕にはわからないその激痛を、今度は勝太君に味わわせるの……!？」

瞬間、澪斗の視線が純也から勝太に移る。そこで初めて、彼の表情に戸惑いが浮かんだのを、俯いたままの純也はわからなかったが、勝手に震える引き金にかけた指に、左手を無理矢理添える。

「……勝太、と言ったか。貴様、母親が目の前で死ぬのは苦痛か？」  
「あつ、当たり前だろ！ 俺の大切な母様なんだっ！」  
「そうか……」

口元を引き上げた奇妙な表情で、澪斗は両手で握った銃を純也から逸らす。

「それならば、貴様が先に死ぬといい！ そうすれば心に傷を残すこともなかるっつ」

「澪君、なんで……っ！」

「あの時の俺がその子供と同じと言っのなら、死ぬば良かったのだ！ そうだ、春菜の代わりに、春菜の前に、俺が死んでいれれば……!?!」

誰も……聖斗さえも聞いたことのなかった、澪斗の激情の叫びは狭い部屋に響く。復讐とは狂気。大切な人間を失った者は、今まで人間らしい心ではいられなくなるのか。

「いい加減にしろっ、澪斗！」

そしてその怒声を聞いた者も、今までいなかった。……片割れの澪斗さえ。

同時に頬を殴られた澪斗は、きつと誰に殴られたかさえわからなかっただろう。頭が理解できないのだ、この状況で、その拳で、あの声で、怒りをぶつけられることなど。だから手中から落ちた銃にも気付かない。気付けない。気付きたくない。

「本当は君が一番死にたいんだろう！？ それが出来ない臆病者だから、君は人を殺し続けるんだろう！？ それに気付きたくないか

ら、ずっと心を閉ざしたフリをし続けるんだろっ!? そんな愚行、もうやめないかっ!」

自分に激昂を吐く兄に、ただ啞然と目を見張るしかない弟。同じ思考を持つ片割れだからこそわかってしまっ、悲しい願望。

そっだ、彼らはただ、

死にたいだけだった。

死に場所のわからない迷子、死に方のわからない子供、死ねない臆病者。

けれど死にたかった、最愛の人のもとへ逝きたかった、復讐者。

「……もう、《死》に執着するのはやめよう、澪斗。僕らは生きなければならぬようだ」

優しい微笑みに戻った聖斗の頬を、雫が伝う。彼が言いたいことを感じ取った澪斗は、呆然ながらも周囲を見渡す。

たかだか数年しか人生を共有していない者達が、信じられないほど真剣な眼差しで自分を見ていることに、今更気付く。何故、この人間達はこんな瞳を向けてくるのだろっ。こんな血まみれの、殺人

者に、復讐者に、臆病者に。

ただ、ただわかることは。

この視界が熱く潤んでくることだけ。

第五章『偽りと銃声』（7）

「もうしばらく待ってください、すぐに準備できますから」

空気が乾燥しきった青空の下、巨大な豪邸の前で聖斗がにこやかに言った。

それぞれ私服に着替えた真達五人も、そこで賑やかながらも待つ。別れの時を。

「純也、あの事だが……」

「何、澪君？」

珍しく齒切れの悪い澪斗を、純也が不思議そうに見上げる。『あの事』という言葉が指す出来事に、覚えがない。

「あの……あの失言を、撤回させてほしい。俺はあの時、あるまじき発言をした。悪かった」

間違いなど起こさない、もしくは認めない澪斗が、純也に謝っている。そのことに驚きながらも、純也はすぐに微笑んで。

「いいんだよ、僕も感情的に動いちゃったわけだし。気にしないで」

そう言う純也のどこにも、誤魔化しや偽善は見えない。だからこそ、もう一度「本当に、悪かった」と謝罪の言葉を。

そこへ割り入ってきたのは遼平。まだ包帯を巻いた右脚でびっこをひきながら、ふて腐れたように澪斗を睨む。

「おい、俺にも謝れよ紫牙。てめえが正体バラすのが遅かったから俺が撃たれたんだぞ？」

「いや、貴様には必要無いだろう、全て台本通りだ」

「俺が撃たれるなんて台本にねえよ！俺がいなかったら今頃死んでたくせにつ！」

「何のことだ？貴様に恩を着せた覚えもなければ、俺が恩を着た記憶も無いが？」

あっさり淡々と白を切られ、分かり易く遼平の額に青筋が浮かぶ。どうやら今回のことは澪斗の中で自動的に『帳消し』になっているらしい。

「て、てめえ……！もう一度てめえの口真似すんぞつ、すんげー情けない声で！『兄上ええ』とか！！」

「するな愚か者があ！」

「痛えつ！紫牙つ、今わざと撃たれた方の脚蹴ったろ！？」

澪斗の声色を真似た遼平の右脚を思いっきり澪斗が蹴った。苦悶の声をあげて情けなくジタバタする男を、少年が苦笑の表情で迎えにきたリムジンに引きずっていく。

「豊臣はんはどうなん？」

「はい、両手両脚に重傷を負っていて、命に別状は無いものの、もう暗殺業どころか一人で生活するのも無理な身体のようにです。どうやら澪斗が意図的に四肢を狙ったらしいですね。お父様には全てを話しました」

「聖斗……これからが大変やと思う。でも、」

「僕らの《生》は、愛され、望まれているんですよ」

完璧に言葉を先読みされてしまい、やはりその高い知性に感心する。苦笑して、「せや。わかっとるならエエんよ」と続けた。そこでふと、聖斗が何気ないことを思い出したようにポン、と手を打つて。

「そつだ真さん、今回の依頼料、中野区支部の口座に振り込んでおきました。すみません、あまりお支払い出来なかったのですが、せめてもと　　二十億ほど」

「につ、二十億〜!?!」

「はい……ごめんなさい、僕のポケットマネーだけだと、これくらいしか用意出来なくて。なんとお詫びすればいいか……」

どンドン頭を深く下げる聖斗に、真はオロオロする。むしろ、彼が土下座したい気分だ。ポケットマネーで軽々しく二十億とか出すこの男は、どんな金銭感覚なのだろう。

「すみませんすみませんすみませんっ！　こんなヤツらなのにすみません!」

「え……真さん??」

ついには泣き出した真も、純也によってリズムジンに乗せられる。純也はただ、「またね」と再会を望む別れの言葉で手を振った。

「澪斗……あの、さ……」  
「どうした？」

残っている希紗に、澪斗が怪訝な顔で問う。俯いたまま、彼女は顔を上げようとはしなくて。

「頑張つて、ね……私応援してるから、頑張つて」

「ああ、貴様に言われずとも力は尽くす。これからはココで『紫牙』として影から兄上を支えていく。案ずるな」

「そう……よねっ、そうじゃなきゃ澪斗じゃないもんね！」

「希紗……何故泣い」

満面の笑みで顔を見せた希紗の目元に溜まった涙に、澪斗の手が上がる。しかし、彼女はそれを振り切るように背を向けて走り去るうとしていく。

「おいっ、希紗、ノアを……！」

「それ、持つててよ！ また会った時に整備してあげるから、大切にしようよっ！」

「希紗っ！」

思わず、呼び止めていた。彼自身、伝えたい思いがわからないまま。それでも。

「貴様には……兄上共々、実に世話になった。俺は貴様を……  
生涯、忘れない」

「あ……当たったり前でしょ！ 私だって忘れないから、絶対……だ  
って私」

振り返らずに言い放った、必死に震えを抑える声。小さく、小さく、微かな言葉。そして彼女はすぐに、迎いのリムジンに乗り込んでしまう。

「さようなら、ありがとうございました、皆さん！」  
「……壮健にしろ」

「また何かあったら僕達に連絡してね！」  
「二人とも、身体は大切にな」  
「……じゃあな」

大きく手を振る聖斗とその後ろで腕を組んでいる澪斗に見送られ、四人を乗せたリムジンは豪邸から離れていく。

……静かに、とても静かになった車内で、ただ一つの音。

彼女のすすり泣く声を、ただじっと聞いていた。

## E L 『別れの戯れ言』

「いやだああああー!!」

「うあああああゝ!!」

同時に絶叫をあげた男と少年が、がっくりと事務所の床に両膝と両手をつく。

揺れる、可愛いフリル。

なびく、胸元のリボン。

そう、まさしくそれは、

女装させられた『遼子』こと遼平と、『純子』こと純也。

「一ヶ月連続で遅刻してきた罰や! その格好で東京練り歩いてこい!!」

「なんで今回はドレスなんだ!? しかもこのレース状の生地は何だ!？」

「僕なんて、セーラー服だよ……!! ミニスカだよっ!？」

希紗が用意した等身大鏡を見て、二人は自分の姿に壮絶な悪寒を感じたのだ。そして、先ほどのあの絶叫。

氷見谷に行く前の記録と、ここ四日の遅刻で、罰執行。またもや二人は新たな婦人服を着る羽目に。

「大丈夫よ、私のメイクで出来るだけ女の子に近づけてあげるから。……遼平には、流石の私もお手上げだけ……」

苦笑いの希紗の表情。それを横目でさり気なく見て、真は心の中でため息を吐く。

氷見谷から帰ってきてから、希紗が純粹に笑わなくなってしまった。

本当はこんな罰、執行しなかったってよかったのだが、（少しでも希紗に笑顔が戻るなら……）と期待したから。

あの寡黙な男がいないだけで、支部はこんなに空回りになるのか。寂しさを出してはいけないのだ……せめて、真だけは。それが部長の役目。

「本当にこの格好で外に出るのか!? 嫌だつ、俺の人格が疑われるー!」

「遼平あんた、今更人格とか言うなや……。秋葉原とか新宿二丁目なら、お仲間がおるかもよ?」

「いろんな意味でそれも怖いよ……。また写真撮られるじゃん……」

一度、路上写真撮影会を経験済みの純也が、涙を流す。何も知らない人が見たら、可愛げに泣く女子高生に見えるだろう。

「贅沢やな。じゃ、いつそのこと渋谷に行くか? あそこなら昼間は人影少ないやん」

「渋谷って言うと、時雨さん達スカイの」

「ぜ……っ、ぜってえ嫌だああー! こんな姿見られるくらいなら俺は死ぬー!」

「そうね、確かに、まさに《邪鬼の権化》だわ……!」

「いや、納得するトコ違うよね、希紗ちゃん。……って、遼! 窓から身を乗り出さないで! ココ三階だよつ、落ちたら死んじゃう

よー！！」

純也が振り向くと、ドレスの裾を持ち上げた遼平が窓を開けて枠に足をかけていた。焦って純也がその純白のドレスを引っ張る。

「死なせる純也っ、いつそのこと俺をココで死なせてくれー！！」

「やめて遼っ、そんなみっともない姿で最期を迎えないでーっっ！」

必死に遼平の女装投身自殺を食い止めようとするセーラー服の純也が、ドレスの腰に抱きつく。それはそれで、壮絶におかしな光景だったが。

「許せ純也、俺は望まれない存在なんだー！！」

「僕を残して独りで逝かないでっ、遼ー！！！！」

「……なんか、見ていていつまでも飽きないわね」

「せやなア……。でも、ウチの事務所ビルの前にこんな自殺体があつても嫌やしなア……。」

呑気な言葉の眼前の、修羅場。その叫びのせいで、誰も開いたドアの音などに気付きはしなかった。

「……そんなに死にたくばさっさと死ね、この愚か者が」

「「「「え……?」「」「」」

聞き慣れた、でも有り得るはずのない声。そして同時に、純白のドレスを蹴り上げる脚。

「だあああああああ

!!!???

「ああっ、遼ー!!」

一瞬宙に浮いて、直後落ちていった純白の衣に包まれた男に、純也が悲鳴をあげる。そして後を追うように、風を纏まとい焦こって飛び降りていった。

「あっ、ちよっ、純也待てってー!」

流石に飛び降りることの出来ない真は、現状確認もしないまま事務所のドアを跳ね開けて階段を下りていく。

「……………フン、相も変わらず騒がしい場だ」

「な、んで、……………澪斗……………」

ただ室内に残った希紗が呆然と、背後に立っていた男に呟いていた。

「本当にいいのですか、兄上？」  
「うん、いいんだよ、これで」

豪邸の外へと続く巨大な門。『氷見谷』と外の世界との、境界線。ここまで来ながら、最後の最後で弟は振り返った。

「蘭様も、勝太君も、（漣斗の睨みで）僕が居ることに納得してくれたみたいだし。だから、漣斗は外の世界で好きなことをしておいでよ」

「すみません兄上、俺は、」

「……うん、わかってるよ。僕は、君が一番輝ける場所に居てほしい。生真面目な漣斗だもん、あの人達を放っておけないよね。君のここ数日の様子で、わかってしまうよ」

「あの者達は……本当に、裏社会で例外の頂点にいるような者達なのです。俺は兄上の傍にいらなくてはならないのですが」

その後の言葉に詰まり、自分でも何と続ければ良いのかわからず、漣斗は俯く。命の片割れである兄の傍にいらなくてはならないのに、それ以上のことなど自分には無いはずなのに。

「僕なら平気。だって、好きな研究をしていられるんだもん。今回

の件で、少しは居心地も良くなりそうだし、ね」

「もし兄上の身に何かあれば、必ず俺は帰ってきます。ですから、連絡はきちんと……」

「ふふっ、そっちこそ、たまには連絡くれると嬉しいな。『便りがないのは元気の証拠』って言うけど、僕が不安になるからね」

「はい……必ず」

「行ってらっしゃい、澪斗。そして、辛くなったらいつでも帰っておいで。ここは、君の家なのだから。君の片割れが、待ってるよ」

ダヴィデの星がついた腕輪をした右手を掲げ、聖斗は空に親指を突き立てる。その仕草を、澪斗も真似て。

「……行って参ります、兄上」

双子が浮かべていたのは、温かく優しいげな笑み。

「『なんで』とは、何だ。俺がココに居て悪いのか」

「そうじゃなくて……氷見谷に残るんじゃないの!？」

平然と言い放った澪斗に、希紗は動揺する。鼓動が、跳ね上がる。

「まあ、俺もそのつもりだったのだがな。兄上に言いくるめられ、

結果的にこうなってしまった」

「じゃ、じゃあ、これからも□□に……?」

「不本意ながら、な。当分俺は、ここで愚か者共と付き合っただけでやることになりそうだ」

「そっか……そうなんだ……」

「だから、何故泣くんのだ」

別れても、久々に会っても泣く希紗に、澪斗は謎が解けない。……きつと彼は、永くその疑問を解けないのだろう。

「……そういえば、あの時、貴様は最後に何と言ったのだ?」

『私だつて忘れないから、絶対……だつて私』

「え、えっ、あ、ああっ、アレは……その………秘密っ!」

「何故だ。そう言われると気になるではないか」

「い、いいじゃない、何だつて! ……いつか、言うから」

「ならば今言えば良いものを」と不思議そうな顔をする澪斗を直視できなくて、希紗は濡れた、赤い顔を隠す。

「そうだ希紗、ノアの整備をしようと言っていたら。やってあげ」

「オツケー、任せてっ」

涙の笑顔で《希望》という銃を受け取った希紗は、どのような想いを感じていたのか、知っているのは彼女だけ。

依頼 7 《生者への鎮魂歌》 完了

『別れの戯れ言』(後書き)

これにて、『閨守護業』第七話は終了となります。

今作もお付き合いくださり、誠にありがとうございました。

何かお言葉を残していたださると、大変作者の励みになります。  
また後日、しばらく間を空けてから続編を投稿する所存です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0072c/>

---

闇守護業 7 《緑鏡》

2010年10月11日14時43分発行